

偏倚ノ誤見ニシテ到底實効アルヘカラサルノ理論ナリトス(ワルテル氏所著自然法及政治論第五百十九節及第六十節アーレンス氏所著性法第二卷第七十四節參照)

故ニ完全ノ所有權ナル思想ハ文化ノ度ニ從ヒ古來其ノ意義ヲ異ニセルヤ明カナリ羅馬法ニ於テハ所有權ハ公法ノ原理ニ基キタル權利ニシテ羅馬國固有ノ本國人又ハ自由民ノミ獨リ之ヲ有シ奴隸ノ如キハ全ク之ヲ得有スル權ナキモノトナシ中世日耳曼ノ法律ニ於テモ單純完全ナル所有ハ法律上身分ノ區別ニ由リテ其ノ特權ヲ有スルモノトセシカトモ近世社會的ノ法理ニ由リテ現ニ之ヲ廢シタリ

碩學スタイン氏カ羅馬法ニ於テハ權利ノ差等ヲ爲サス法律上ニ於テハ全國民盡ク同等權ナリシト云ヘルハ誤レリ(同氏所著行政學第七卷

第九百九十五葉參照

斯ク羅馬法及中世法律ニ於テハ共ニ法律上各人各個ヲ以テ同等ナリトスルノ原理ヲ認了セサリシカ故ニ其ノ文化發達モ亦只々此ノ範圍ニ於ケル程度ヲ超ヘサリシヲ知ルヘシ而シテ近世ニ至リテハ素リ此ノ原理ヲ襲フナキモ單ニ舊法ヲ廢シテ而シテ後已ミタルモノニアラス之ニ代ユルニ近世社會中ニ於ケル社會法ヲ以テセリ如何トナレハ各人不同等權ヲ有シタル舊法ヲ廢シ只々私有財產權ノミヲ存スルモ未々以テ公ケナル社會文化ノ狀態ヲ維持スルニ足ラサレハナリ

(リヨースレル氏所著アダムスミス派經濟論評第八章及財產權ノ沿革ニ就テハアーレンス氏性法第二卷第七十六節參照)

第二百二十二節 所有ノ自由

物ニ關スル社會法ハ物ニ關スル私法トハ大ニ其性質ヲ異ニストスル原理ヨリシテ必然諸種ノ結果ヲ發生スヘシ而シテ此等諸結果ノ關係タル占有及ヒ之レニ關スル法律上ノ諸問題如何ヲ明知スルニ就テハ最も重要ノ事項タリ今マ全体ニ就キ之ヲ論スレハ物ニ關スル社會法ハ全ク物ニ關スル私法ノ原理ト獨立シ從ツテ社會法ニ屬スル問題ハ私法ノ原理ヲ以テ之ヲ解クトヲ得サルハ已ニ多言ヲ待タスシテ自ラ明カナラム但シ物ニ關スル社會法ハ一般社會法ノ如ク私法ニ基キ且ツ二者往々相ヒ密着スル丁少ナカラストス。

所有權中ニハ其ノ物品ニ對スル全權ヲ含有シ此物品ニ對シテ如何ナル權カト雖皆ナ盡ク其中ニ存ストスルノ理論ハ全ク之ヲ廢セサルヘカラス私有權ノ獨立ナル所以ハ只々其ノ固有ナル私法ノ範圍ニ於テ

然ルノミ一タヒ此ノ範圍ヲ超過セハ決シテ其ノ獨立ヲ保ツテ能ハス然レモ又茲ニ一種陳腐ノ宗教說ヲ主張スルモノアリ私法ノ範圍ト雖私人特有ノ所有權ノ存スルヲ駁撃シテ曰ク人類ノ初祖カ天帝ノ惠ニ由リテ極樂園中ニ淨息シ辛苦ノ何物タルヲ知ラス只々萬人共樂人類同等ナリシハ實ニ人類本來ノ情況ナリ故ニ私有財產アルトヲ許スハ此ノ大本ヲ破ルモノナリト(ワルテル氏所著自然法及政治論第百五十九節ロッシェル氏所著羅馬法第一卷第七十九節參照)

財產ハ不正有害ナル發達ヲ爲シ得ヘキモノタルハ素リ明白ナリト雖是レ私有財產アルノ故ニアラスシテ寧ロ之ヲ社會進化ノ本旨ノ誤解若クハ偏見ニ由リ財產權ヲシテ其ノ範圍ヲ超過セシメタルノ過失ニ歸セサルヲ得ス現ニ今世紀ニ於ケル中等工業社會ニ國家カ過度ノ干涉保護ヲ加ヘタルハ工業ノ外社會中他ノ種類ニ對シテハ頗ル公平ヲ欠キタル處置タルヲ免レス蓋シ工業經濟主義ノ誤說就中アダム、スミ

ス氏以來世人ノ認了セル所謂經濟上天然ノ法則ナルモノハ宜シク之
レヲ改メテ代ユルニ社會法ニ基キタル所有及工業事項ニ關スル論理
ヲ以テセサルヘカラス(リヨースレル氏所著アダムスミス派經濟論評
参照)

物ニ關スル法律ニ就キ社會法ト私法トノ關係ヲ舉クレ
ハ左ノ數項ニ歸ス

(第一)物ニ關スル社會法上ノ權利ヲ行ヒ得ル者ハ必スシ
モ私法上ニ於テ之レヲ所有スル者ニ限ルヘキモノニア
ラス設令ヘハ板權ハ必スシモ草稿ヲ所有スルノ權アル
モノニ歸セス土地ヲ讓與スルノ權利ハ必スシモ其ノ私
有者ニ在ラスシテ此ノ土地ニ關スル社會權ヲ有スル者
ニ屬スルトアルカ如シ

(本篇以下第二卷第二章及アーレンス氏性法第二卷第二百二十三節附論

第一ニ詳論ス)

(第二)私人ノ財産ヲ處分スルノ權力ハ社會法ノ範圍ニ侵
入スルトヲ得ス故ニ社會法ノ意ニ背馳スル事項ハ財産
私有者ノ意思ヲ以テ之ヲ決行スルトヲ得サルナリ

設令ヘハ地役レアラステン〔按〕スルアラステン〔按〕ハ地役ト等シク土地ニ
サレ義務ヲ主トシテ「レアラステン」時々成ルル地役ト爲サレハカ
設務ヲ主トス設令ヘハ河岸ニ沿フタル土地ノ所有者ハ隣地ノ爲メニ
其ノ地内ノ堤防ヲ修理他人ノ地内ニ於テ獸獵スル權等ノ如キハ單ニ
土地私有者ノ權力内ニ存シテ其ノ意思ニ從ヒ自由ニ得有シ得ヘキモ
ノニアラス(本篇以下土地自由權回復ノ結果ヲ論スルノ一章ヲ参照セ
ヨ)

(第三)社會法上ノ權力ハ物ニ關スル私權利ヨリ發生スヘ
キモノニアラサルヲ以テ單ニ土地ノ所有權アレハトテ
必スシモ自由ニ之ヲ開拓讓與若シクハ分割スルノ權ア

ルニアラス單ニ書類草稿ノ所有權アレハトテ必スシモ無形ナル板權アルニアラス其ノ他ノ社會權ニ於テモ亦皆ナ然リトス故ニ物ニ關スル社會法ハ一種特別ナル獨立ノ法律ヲ構成スルモノト知ルヘシ

故ニ社會文化ノ思想ハ盡ク財產私有權ヲ其ノ中ニ網羅シ私有財產ヲ全滅セシムルモノニアラスト雖二者ノ間其ノ區別實ニ毫髮ヲ容レサルモノアルカ故ニ實際社會權ト私權利トノ區別ハ制定法律ヲ以テ之ヲ一定セサルヘカラサルナリ

(第四)物ニ關スル社會法ハ能ク私有財產法ノ力及ハサル權力ヲ發生ス故ニ私有ノ財產ト爲スト能ハサル物ト雖モ尙ホ社會的財產タルトヲ得

設令ヘハ流水原野、礦産出版、發明等ノ事物ニ就キテハ獨リ社會法上所有權ヲ得有スルコアルニ過キス故ニ此等ノ事物ヲ以テ能ク私有財產

權中ニ包含シ得ヘキモノトスルノ説ハ素リ誤謬タルヲ免レス如何トナレハ私有財產法ノ原理ハ決シテ之ヲ此等ノ事物ニ適用スルコト能ハサレハナリ(本篇以下第五款參照)

(第五)物ニ關スル社會法ハ社會文化發達ノ勢力ニ由リ占有者若クハ所有者ニ負擔セシムルニ私法上ニ於テハ公正ナラストナスヘキ義務ヲ以テスルコトヲ得故ニ此等ノ義務タル決シテ之ヲ私有財產權ヲ破リタルモノト見做スコトアルヘカラス

此等ノ義務ハ建築警察上ノ制限、公益用土地引上等ニ關スル成規ヨリ生ス(本篇以下第五款參照)

(第六)社會物上權得喪ノ方法ハ私法上ニ於ケルモノト同シカラスシテ一般ニ社會法上ノ思想ヨリ必然發生スル結果ニ外ナラストス

社會物上權ノ得有ハ數々公ケナル官衙ノ許可ヲ要ス礦產專賣免許等ノ類ノ如シ(本篇以下第四款ヲ參照スヘシ)

(第八)社會法上權力ノ使用モ亦私法上ニ於ケルモノト異ナルトヲ得ヘク就中此權力ハ多數決ニ由リ若クハ公ケナル官衙ノ許可ヲ經又ハ官衙ト共同作用ヲ爲スニアラサレハ其ノ使用ヲ爲サシメサルトヲ得ヘシ

第二百二十三節 物權得有ノ自由

物權ハ一般ニ人身自由ノ思想ヨリ發生シ人類ノ意ニ服從セシメ得ヘキ天造物上此ノ思想ノ實行ト併馳ス故ニ物權ハ人身自由權ノ原理ヲ天造物得有ニ適用シタルモノナリ即チ此ノ原理ヨリ左ノ數原則ヲ發生ス

(第一)天造物ヲ得有シ得ヘキ法律上ノ資格ハ人々交互及ヒ國家ニ對シテ各人ノ享有スル自由ノ程度及種類ニ相

應セサルヘカラス

故ニ奴隸ハ更ニ物品得有ノ權利ナク其ノ身體自身ノ如キモ尙完全ナル所有ニアラサルナリ又一家中ノ妻子ノ如キ素リ奴隸ト同視スヘキモノニアラサルモ物品得有權ニ付キ其ノ制限アル所以ニ至リテハ即チ相同シ

(第二)自由ヲ有セサル者ノ物權ヲ得有スルノ能力ハ他人就中其ノ主人ノ支配ヲ受ク

獨逸農法ハ農夫カ借地ヲ使用處分スルノ能力如何ハ地主若クハ後世ニ於テハ地方官衙ノ決議ニ一任セリ

(第三)權利ヲ得有シ得ヘキ資格ニシテ只タ法律上ノ一團結即チ市邑若クハ國家中ノ一員タル資格ヲ有スル者ノミニ屬シ社會中汎ク獨立ナル一個人タル資格ヲ有スル者ニ屬セサル間ハ各人各個ノ社會的物上權ハ爲メニ束

縛セラレタルモノト做サ、ルヲ得ス

設令ヘハ古代「マルク」ト稱シタル團結ニ於テ新ニ其ノ團結中ニ加入シ
而シテ此ノ加入ニ由リテ始メテ土地ヲ得有シ得ルノ權利ノ有無ハ全
ク此ノ團結ノ隨意ニ決定スル所如何ニ存ス故ニ斯ノ如キ團結ハ各人
各個ヲ以テ獨立自由ナル一個人トナシ他ノ制限ヲ受ケスシテ權利ヲ
得有スルノ權アルモノトスル社會法ノ原理ニ反スルモノナルカ故ニ
社會的物上權ハ爲メニ束縛セラレタルモノトセサルヲ得サルナリ「マ
ルク」團結ノ外或ハ宗教ノ異同ニ由リテ此ノ權利ヲ異ニシ或ハ國家中
ノ一員即チ本國民ノ外他國人ハ土地所有權ヲ有スルヲ能ハザルモノ
トスルカ如キモ亦同一ノ批評ヲ免レス「ゲンゲレル」氏獨逸私法論第一
卷第五十四節及ヒ第八十八節參照

(第四)社會法ノ原理已ニ行ハル、ノ時代若クハ邦國ニ在
リテハ物上權ノ如キモ亦社會法ニ從ヒ自由ニ之ヲ得有

スル丁ヲ得可シ蓋シ今日ノ社會法ハ物權ニ關スル事項
ニ就テハ人身ノ束縛隸屬ハ其ノ如何ナル種類ニ屬スル
モノト雖盡ク之レヲ拒絕シ古代ノ束縛隸屬ノ制ヲ廢止
シ權利得有ニ付テハ萬民同等各人自由ノ原理ヲ實行ス
ルヲ以テ其ノ本旨トス

此ノ社會法ノ原理ヲ實行シ束縛隸屬ノ弊ヲ一洗シタルハ即チ土地自
由權回復ノ事ニシテ物ニ屬スル社會法中重要ナル一章ヲ成スヘキモ
ノナリ「スタイン」氏所著行政學第七卷第七十四葉參照

今マ夫レ社會法ニシテ苟モ日新ノ文化ニ適應セサル如
キアラシカ必ス之ニ相當スヘキ社會法ヲ制定スルヲ要
ス故ニ古代ハ全ク存在セス或ハ設令ヒ之レアリトスル
モ極メテ狹少ナル範圍ヲ有スルニ過キサリシ社會法モ
今日ハ遂ニ一派獨立ノ範圍ヲ成スニ至レリ而シテ此等

社會法ハ必然所有權ニ付スヘキ義務ヲ以テスルカ又ハ私法ノ範圍ヲ超過シ尙ホ一層財產權ノ思想ヲ擴張スルモノナルヤ否ニ從ヒ自ラ二類ニ類別セラレヘシ

私有財產ハ本來占有ニ淵源スルモノナルカ故ニ私有財產上ニ於ケル義務ハ只々其ノ所有者ノ意思ノミニ依リテ之レヲ負ハシムルヲ得レト出板權ノ如キ無形物若クハ河流、礦原、魚類、礦產等ノ如キ浩漠トシテ力ノ及フ能ハサルモノハ之レヲ私有ノ財產トスルヲ得ス如何トナレハ此等ノ事物タル決シテ現ニ人々ノ占有シ能フヘキモノニアラサレハナリ故ニ此等ノ物ニ關スル權利義務タル社會法ノ思想ニ依ルニアラサレハ決シテ之ヲ考察スルヲ得ス而シテ此等ノ事タル古代ニ在リテハ專ラ市邑若クハ警察ノ法規ニ從ヒタルモノナレトモ今日ハ之ニ代ユルニ社會行政法ヲ以テスルモノナリ(本書前第二十節乃至第二十三節參照)

已ニ前第二百二十節ニ於テ論述シタルカ如ク社會法ハ私法ノ如ク單ニ物ヲ以テ物ナリトセス常ニ社會法ノ事項ニ從ヒ之ヲ分類シ其ノ分類ハ大別細目共ニ文化發達作用ノ種類ト相對スヘキモノトス依テ物ニ關スル社會法ハ左ノ類項ニ之ヲ分論ス

- (第一) 不動產所有ノ自由
- (第二) 動產所有(資本)ノ自由
- (第三) 財產ノ負擔スヘキ社會法上ノ義務
- (第四) 社會法上財產ノ増殖

第三款 土地所有ノ自由

第一章 土地所有權ノ總說

第二百二十四節 羅馬不動產法沿革

土地所有ノ自由ハ土地私有權ヲ以テ社會法上ノ思想ニ
協合スルニ基源セリ

凡ソ社會法ハ公法ニ屬スヘキモノナルカ故ニ土地ニ關スル社會法モ
亦公法ノ一部ニシテ其ノ之ヲ講究スルニ就テモ全ク私法ノ範圍ヲ離
レ且ツ私上法ノ原理以テ社會法ニ適用スルコトアルヘカラス此ノ理ニ
シテ明カナラスンハ土地所有ニ關スル確説ハ決シテ之ヲ理解スルコ
ト能ハサルナリ(スタイン氏著行政學第七卷第六十九葉參照)

近世ニ於テハ社會ヲ以テ萬民同等ナル文化發達ノ法律
ニ服スヘキ自由ノ共同体(本書前第二節參看)ト見做スカ
故ニ社會法上土地ノ所有權ハ其ノ古代ニ於ケル者ト大
ニ相ヒ異ナル所アリ如何トナレハ古代ノ人類社會ニハ
自由ノ主義全ク行ハレス或ハ往々之レヲ行フモ只々萬
民不同等ナル自由ノ存スルモノアルニ過キサリシトナ

レハナリ

(所有權ノ沿革ハアーレンス氏所著性法第二卷第七十六節及ヒ就中其
ノ羅馬ニ於ケル沿革ハブフタ氏所著羅馬法第二卷第二百三十五節及
ヒ二百三十六節ニ詳論ス)

各人各個ニ屬スル土地私有權ノ性質ハ古今何レノ時代
ヲ問ハス權利ノ主体タル各人ト其ノ各人各個ノ所屬ス
ル共同体トノ關係如何ニ由ツテ始メテ定マルヘキモノ
ニシテ宇宙ノ間ニ存在スル人類ノ天然自立ノ關係ニ由
リテ定マルヘキモノニアラス

故ニ所有權ノ根源ヲ以テ社會一般ノ要素就中勞力需用又ハ占領等ニ
在リトスル架空ノ論理ハ全ク其ノ正確ヲ失ヒタルモノト云フヘシ(ロッ
シエル氏所著パンテクテン第一卷第七十七節附論第二ハスネル氏所
著經濟學第一卷第四百十八節ヲ參照セヨ)殊ニ所有權ノ思想ヲ以テ農

業經濟上ノ天然ノ法則ヨリ發生スルモノトシ之レヲ以テ何レノ時代何レノ邦國ヲ問ハス當サニ適用シ得ラルヘキモノトスルノ説ニ至リテハ其ノ誤謬タル素ヨリ論ヲ待タス

羅馬ノ古代ニ於テハ全國ノ土地盡ク國家ノ所有スル所ニシテ土地ノ私有權アルナク各人各個ハ只々動産ヲ所有スルヲ得ルノミナリキ

(古代ノ羅馬ニ於テハ土地私有權ナカリシコトハニーブル氏所著羅馬史第四百十六葉ブター氏所著羅馬法第一卷第四十節及ヒ第二卷第二百三十五葉モンムムセン氏所著羅馬史第一卷第百八十七葉等ニ論述スル等ナレド反對ノ駁論モ亦必シモ無キニアラス尙ホシユウヱーゲル氏所著羅馬史第一卷第六百十七葉イェリシグ氏所著羅馬法精理第一卷第百九十八葉マイエル氏所著公用土地買上法第十四葉等ヲ參照スヘシ)

土地ヲ以テ國家ノ專有トスル羅馬法ハ平民ニ許スニ國事ニ參與スルノ權ヲ以テシタリシ以來全ク廢止セラレ羅馬固有法ニ於テモ大ニ土地私有ノ權ヲ擴張シ國家ハ只々公ケノ資産トシテ土地ノ一部ノミヲ專有スルニ過キサリシト雖土地ヲ私有シ得ルノ權ハ獨リ羅馬固有ノ都人士ニ止マリ郡民及外國人ハ萬民普通法即チ專ラ外國人ニ適用スル羅馬法ニ從ヒ事實上土地ヲ私有スルノ結果ヲ得タルノミ

(按羅馬固有法ニテハ賣買取引等ニモ嚴正ナル儀式アリ此ノ儀式ヲ履行セサレハ所有權ヲ得ルコト能ハス而シテ外國人ニハ此等ノ儀式ヲ備ヘタル固有法ノ保護ナキ故ニ羅馬ノ外國奉行ハ口實ヲ裁判手續ニ假リ正式ニハ所有權ヲ得ルコト能ハサル外國人ト雖間接ニ於テハ實際土地ヲ所有スルト同一ノ結果ヲ得セシメタリ之レヲ羅馬普通法上ノ

所有權ト稱シ固有法ノ所有權ト併立セシメ羅馬ニハ二様ノ法律アルニ至レリ本文ニ外國人ハ只々事實上ニ土地所有權ヲ得タリト言ヘルハ此ノ謂ナリ

斯ク羅馬固有ノ都人ト他ノ人民トノ差異ニ由リテ土地ヲ所有シ得ヘキ權利ノ有無ヲ定メタレト固有法ト普通法トノ區別ノ廢滅ト共ニ人々ニ由リ土地ヲ得有スルノ權ヲ異ニセルノ法モ亦自ラ其ノ効力ヲ失ヒガヤスチニヤン帝ニ至リテ遂ニ此ノ差異ヲ全廢シタリ然レト自由人ト奴隸トノ區別ハ依然トシテ存在シ苟モ奴隸タル以上ハ土地ハ勿論全ク一般ノ所有權ヲ有スルトヲ得サリシヲ以テ當時ニ於ケル土地所有權ノ性質ハ人身ノ自由ノ有無如何ニ基キタル權力タルヲ免レス而シテ此ノ餘弊タル畜ニ奴隸ノ一種ニ止マラス「コロナス」ト稱スル下

等農夫ノ一種ニ之レヲ擴張シテ大ニ其ノ所有權ノ得有ヲ制限セリ

(プフタ氏所著羅馬法第二卷第二百三十五節及ヒ第二百三十六節「エルデルフランド」氏纂經濟及統計年鑑第二卷第二百六葉「ロツドベルタス」氏所說ヲ参照セヨ)

第二百二十五節 獨逸不動産法沿革

獨逸法律ニ於テハ所有權ハ人々カ各々直接ニ物体上ニ有スル權力ナリトシテ土地ノ如キニ至リテモ亦等シク人々ノ所有シ得ヘキモノナリトセルノミナラス本來社會權ノ物体タルヘキモノハ獨リ土地ノミニ止マリ動産ノ如キハ只ダ不動産ノ附屬物ニ過キササルモノト見做セリ

(ケルヘル氏所著獨逸私法論第七十六節「ウルテル」氏所著獨逸法沿革史

第二卷第五百節ブルンチエリ一氏所著獨逸私法論第一卷第五十一節
及ヒ第五十五節及ヒ本書以下第百七十七節參照)

然レ凡所有權ニ關スル獨逸法ハ羅馬法ト全ク異リタル性質ヲ有シ特ニ獨逸固有ノ性質ヲ帶ヒタリ蓋シ羅馬法ニ於テ所謂所有權ナルモノハ單ニ各人各個ニ固着セシメ國家公共ノ制度ニ由リ以テ其ノ安全及ヒ效果ヲ發生セシト雖獨逸ニ在テハ別ニ所有ニ關スル一派ノ法律ヲ爲シ其ノ發達ハ專ラ多數ノ人衆相結合シテ國內ニ狹小ナル數團結ヲ構成シ爲メニ各人各個ノ所有權ト團結體トノ所有權即チ分離シタル所有ト共同ナル所有ト必然相ヒ接近シテ併存シタルノ事實ニ基ケリ故ニ羅馬ニ於テハ私有權ハ各人各個ト國家トノ關係ニ基キ獨逸ニ於テハ各人各個ト其ノ所屬ノ團結共同體(即チ地主組合團

結ノ類トノ關係ニ基キシモノト言フヘシ

羅馬ノ古代ニ於テハ全國ノ土地ハ盡ク國家ノ所有ニシテ私有ノ土地ナカリシヲ故ニ後世土地私有權ヲ許スニ至リテハ只々國家ト各人各個トノ關係ニシテ獨逸ニ於ケルカ如ク各人各個ト社會共同體トノ關係ナカリシヲ確證スルニ足レリ(プフター一氏所著羅馬法第一卷第三十九節及ヒ第四十節參照)

故ニ獨逸ニ於テハ羅馬法ノ私有權ノ代リニ土地所有ノ關係ニ於ケル共同體ヲ發生シ此ノ共同體ハ再ヒ多數ナル種々ノ外形ヲ呈シテ土地所有ニ關スル獨逸法ハ實ニ錯雜ニシテ之レヲ了知スルノ困難亦甚シキヲ致セリ加之獨逸古代ノ法ニ於テハ身分ニ由リ所有ノ自由ヲ束縛シ近世ニ至リテ之レヲ全廢スルニ至レル迄ハ獨逸法ハ羅馬法ト等シキ進步ノ速度ヲ以テ其ノ發達ヲ爲ス丁能

ハサリシ是レ獨逸ニ於テハ土地所有ニ關スル法律ノ堅全安固ヲ得スシテ自由民モ亦自由ナキ人民ト共ニ其ノ弊ニ苦ミ共ニ其ノ利益ヲ全フスルヲ能ハサリシ所以ナリ

(グリム氏所著獨逸古代法第四百九十五葉參照)

第二百二十六節 同上

獨逸法ニ於テ各人各個ニ屬スル所有權ノ原理ノ實行ヲ遲滯セシメタル團結体ハ本來之レヲ二種ニ區別スルヲ得ヘシ一ハ衆人ヲ以テ同等トスルノ原理ニ基キ一ハ衆人ヲ以テ不同等トスルノ原理ニ基タル團結体トス○右第一種ノ團結体ヲ共同組合ト云ヒ第二種ノ團結体ヲ地主統括ト云フ共同組合ノ團結員ハ權利ヲ得有スルニ付キ概テ同等ナル資格ヲ有シタリシモ地主統括内ノ團

結員ハ不同等ナル能力資格ヲ有シ地主ノ配下ニ服シタリ而シテ此ノ地主ハ其ノ管轄内ノ土地ニ付キテハ高等ナル所有權ヲ有シ其ノ管轄内ノ人民ニ對シテ首領タルノ權力ヲ實行セリ

然レモ右二種ノ團結体タル相互ニ混交シテ二者併立セラルト少ナカラズ即チ斯卡、ル混交ノ場合ニ於キテハ地主統轄ノ配下ニ在ル人民相互ノ間ニ於テ別ニ共同組合ヲ組成シ而シテ此共同組合ハ更ニ地主統括ノ管轄ニ屬シタリ故ニ今マ此ノ混交ノ團結体ヲ以テ別種ノ者ト見做ス片ハ全体ニ於テハ自由ナル團結体自由ナキ團結体及ヒ二者混交ノ團結体ノ三種ヲ區別スルヲ得ヘシ

自由ナキ共同組合ニ於テハ自由ナキ人民即チ「コロナス」ト稱シテ農業ニ從事シタル奴隸アリテ地所ヲ耕作シ自由ヲ有セル共同組合ニハ真

正ナル土地所有主アリシ迄ニシテ殊ニ中世ニ至リテハ決シテ地主ハ人民ニ對シテ首領タルノ權カナク只々地主ノ管轄ニ屬シタルニ過キサリシモノナリトス(モーレル氏所著共同組合法沿革史第八十四葉比較)

共同組合ト地主統括トノ制度ハ其ノ團結ニ屬スル各人各個ニ付キ亦大ニ土地ニ屬スル諸權利ノ差等ヲ生シタリ即チ其ノ團結内ノ人民ハ身分上各々全ク自由ナキモノト只々幾分ノ自由ヲ有スルモノト又々全ク自由ヲ有スルモノナルト否トニ從ヒ地主ニ對スル人身上ノ關係ヲ異ニシ此ノ關係ノ差等ヨリ從ツテ又其ノ他ノ種々ナル諸結果ヲ發生セリ○地主ハ只々其ノ土地ニ屬スル諸權利ノ關係ニ就キ其ノ地内ノ人民ニ對シテ權力ヲ有シタルノミナラス人身ノ關係上地主ノ保護管督ヲ受クル

ノ目的ヨリ遂ニ領主ト配下トノ關係君主ト臣民トノ關係等ヲ生スルニ至レリ
近世社會法ノ原理ニ反シタル右等ノ隸屬束縛ヨリシテ地主ノ配下ニ屬スル人民ハ諸種ノ權利ヲ得有シ諸種ノ義務ヲ負擔セリ就中土地讓與ノ制限及ヒ諸種ノ負擔及ヒ就役ニ服スルノ義務等ヲ以テ其ノ最モ著ルシキモノトス而シテ古代ノ獨逸法ハ斯卡、ル負擔及就役(徭租)ヲ以テ當時ノ社會發達ノ目的ヲ達スルノ用ニ供ヘタリ
最後ニ尙ホ注目スヘキハ教會ノ發達ナリ蓋シ教會ハ精神上ニ於テハ首領タルノ權力ヲ有シ或ハ人民ニ土地十分一稅ノ如キ義務ヲ負擔セシメタルノミナラス中世ニ於テハ廣大ノ土地不動産ヲ有シテ獨リ宗教上ノミナラス又々現世ノ社會上ニ於テ地主タルノ權力頗ル大ナル

モノアリシハ史上ノ事跡ニ昭々タル所ナリ
上來論述スル所ニ由リ本款ニ於テ土地所有ノ自由ヲ論
述スルニハ左ノ順序ニ從フヲ以テ適當ナリトス

第一 古代不動産法

第二 社會法ノ思想ノ勢力ニ由リ古代法ノ廢滅

(不動産束縛法ノ廢止)

第三 右古代法廢止ノ近世不動産法ニ於ケル諸

結果

第二章 古代不動産法

〔第一〕 共同組合

第二百二十七節 共同組合ノ本性

共同組合ハ「マクル」ト稱スル境地内ニ於ケル土地占有者

ノ結合ニシテ其ノ結合團結ノ起源タル各人各個ニ分割
シタル土地ノ耕作及ヒ各人各個ニ屬セサル土地(即チ森
林、牧場、河川、道路)ノ公共ナル使用ニ關スル共同普通ノ法
則ヲ設クルノ必要ニ基キタリ○各人各個ニ分屬セスシ
テ公共ノ使用ニ屬スル土地ニ關スル事務タル概テ定規
ノ組合集會ニ於テ其ノ行政ヲ掌リ團結體ノ資格ヲ以テ
刑律ヲ布キ裁判權ヲ執行セリ而シテ右組合集會タル各
組會員ハ皆ナ之レニ出席スルノ權利及ヒ義務ヲ有シ且
ツ其ノ集會ニ於テ自ラ撰擧シタル組長ヲ以テ其ノ指揮
監督ノ事務ニ任シタリ

(クリム氏所著古代獨逸法第四百九十四葉レナード氏所著獨逸法雜誌
中ノ論說第九卷第一節ランダウ氏所著不動産沿革史第六十二葉及ヒ
第百十一葉モーレル氏所著獨逸共同組合沿革第一葉及第百九十六葉

ワルテル氏所著獨逸法沿革史第一卷第百節及ヒ第二百八十節ツディ
ヒム氏所著獨逸共同組合法第百二十二葉及ヒ第百七十一葉ゲルベル
氏所著獨逸私法論第五十一節附論第三參照

「マルク」ノ共同組合員タルヲ得ルニハ一人私有ノ田地家
屋ヲ有シ又ハ少クトモ一家計ヲ營ミ「マルク」ノ地境內ニ
住居ヲ定メタル者ニ限レリ

「マルク」ノ境地ニ定住セス又ハ土地家屋ヲ有セサル者ハ共同組合員タ
ルヲ得ス設例ハ獨立セサル子孫日雇人家僕同居人職工等ナリ而シ
テ此ノ「マルク」共同組合ニ於テ職工ノ組合員タルヲ禁シタルノ精神
ハ「マルク」境地內ニ可成營業ヲ制限スルノ政畧ニ出テタリ(モーレル氏
所著獨逸「マルク」共同組合法沿革史第百十五葉及ヒ第七十八葉ツディ
ヒム氏所著獨逸共同組合法第百二十六葉ドエンケル氏所著獨逸古代
法第五百五葉及ヒ第五百二十八葉參照)

各人ノ占有ニ係ル耕地田畠樹木ハ各人ノ邸宅ニ付屬シ
而シテ數多ノ邸宅相ヒ結合シテ概テ一村落ヲ成スト雖
又或ハ一村落ヨリ分立スルヲ得タリ故ニ「マルク」共同
組合ノ成規ニ於テハ家屋ト邸地下ハ常ニ相ヒ併合シテ
分離スヘカラサルヲ以テ家屋又ハ邸地兩者中ノ一ノミ
ヲ處分スルノ權就中之ヲ讓渡スノ權ヲ認了セス只タ土
地ヨリ生スル利益ニシテ單ニ人ニ屬スル權利トナリタ
ル者即チ不動産ニアラサル物品トシテ之レヲ讓與スル
トヲ得ルニ止レリ

(ワルテル氏所著獨逸法沿革史第一卷第百〇四節ドエンケル氏所著共同
財産論第十八節第百六十九葉及第十九節ツディヒム氏所著獨逸共同
組合法第百六十二葉參照)

然レ凡右等ノ制限內ニ於テハ土地ヨリ生スル收穫ニ付

テハ自由ニ賣買讓與質入若クハ分割ヲ爲ス丁ヲ得タリ
由是觀之「マルク」共同組合ノ完全ナル組合員タル者ハ只
タ邸宅地所ノ占有及ヒ收穫ノ三者ヲ併有スルヲ要スレ
氏稍ヤ權力ノ少ナキ組合員タランハ住家ヲ有シ若クハ
狭小ノ土地ヲ占有シテ而シテ其ノ「マルク」境地内ニ定住
スルヲ以テ足レリトス但シ此ノ組合ニ加入スルニハ其
ノ多數組合員ノ承諾一致アル丁ヲ要セリ

組合ニ加入スルニ付組合員ノ承諾一致ハ後世ニ至リテ例規トシテ常
ニ之ヲ得ヘキトナリタレハ必ス加入金ヲ拂ハサルヘカラス而シテ
其ノ加入者ハ外邦人タルト内國人タルト否トヲ問ハス「マルク」組合ノ
役員ニ服従シ「マルク」組合ノ事務ヲ補助シ且ツ如何ナル危害ト雖「マル
ク」組合ノ爲メニハ之レヲ防禦スルヲ誓ハサルヘカラス「ワルテール
氏所著獨逸法沿革史第一卷第百〇四節モーレル氏所著獨逸「マルク」共

同組合沿革史第百十二葉參照

第二百二十八節 共同組合ノ土地

「マルク」共同組合ニ於ケル不動産法ハ私法ニ屬スルモノ
ト組合ニ屬スルモノトノ二元素ヲ混交シタルモノナレ
ト學者往々此ノ事實ヲ看過スルモノ少シトセス抑モ各
人各個ニ分割セル耕作地ハ其ノ邸園等ト共ニ各邸地占
有者ノ私有タリシハ疑ヲ容レスト雖又タ一般公同ナル
法則成規ニ從ヒ之レヲ統括セサルヘカラサリシナリ

各人各個ノ邸宅耕地等ハ其ノ私有ニ屬セシト雖自由ナキ人民若クハ
家來ノ如キ完全ノ所有權ヲ得ルノ資格ナキ者ハ素ヨリ之レヲ私有ト
スルヲ得ス如何トナレハ「マルク」ノ境地ハ地領主若クハ主人ノ所有
ニ屬セシモノナレハナリ但シ此ノ場合ニ於テハカ、ル自由ナキ人民
若クハ家來等ハ「マルク」境地ノ使用ヲ爲ス丁ヲ得レハ借地料其ノ他ノ

負擔スヘキ金額ヲ地領主若クハ主人ニ拂ハサルヲ得ス(モーレル氏所著「マルク」法沿革史第六十七葉「ランダウ氏所著不動產沿革史第六十七葉」ドエンケル氏所著共同財產法第六十二葉參照)

各人私有ノ土地モ亦公同一般ノ成規ニ由リテ之レヲ支配スヘキモノトセリ即チ各人各個ニ境地ヲ分割スルニモ萬人畧ホ同一ニシテ差等ナシト雖只々地質ノ善惡ニ由リ多少ノ差違ナキヲ得ス(ワイスキュー氏所著獨逸法雜誌第三卷八十九葉「フルックス氏所著新撰官報雜誌第三卷第七十七葉第六卷第一葉」ハンセン氏ノ說參照)

右ノ法則成規ノ起因タル半ハ當時各人各個ノ保有スル土地ハ數多ノ田園ニ分離セルカ故ニ土地ノ改良耕作牧畜等ニ關シテ一般同等ナル秩序ヲ保存セントスルノ意ニ出テ半ハ「マルク」組合共同ノ田野ヲ利用スルノ制限ヲ設ケ各人各個カ之ヲ利用スルニ就キ他人ノ權利ヲ防害

スル「ナカラシメントスル」ノ趣旨ニ基ケリ故ニ又此等ノ法則成規ヨリシテ家屋邸地ノ所領者各自相互ノ間ニ於ケル數多ノ權利義務ヲ發生セリ○右等ノ權利義務ハ條例及ヒ「マルク」組合會議ノ議決ニ由リテ整序セラレ遂ニ私法上ニ於ケル土地制限タルニ至レリ然レモ此ノ制限タル徹頭徹尾公同組合的ノ性質ヲ帶ヒタリ

一般公同ノ經濟ニ關スル成規ハ耕耘、播種、收實ノ時期等ヲ定メ又々共同原野山林河水ノ利用ノ方法等ヲ整序スルモノニシテ「マルク」共同團結ノ意思ニ從ヒ之ヲ實行セリ(ワイスキュー氏所著獨逸法實踐論第六十一葉「グリム」氏所著古代獨逸法第五百葉等參照)

第二百二十九節 共同土地使用權

共同組合ノ土地即チ「マルク」ハ單ニ組合員タル者ノ所有ニアラサルノミナラス無形的ニ想像シタル組合員又ハ

其各部ニ屬シタルモノニアラス故ニ組合員タル者ハ只
タ「マルク」ト稱スル境地ヲ利用スルノ權利アルノミニシ
テ決シテ各人各個ニ分割セル土地ニ於ケルト同一ノ權
利ナカリシナリ

共同ノ境地即チ「マルク」ハ往々羅馬ノ財産法ニ於ケル「ユニベルシタス」
(有形物又ハ權利義務等ノ無形物タルヲ問ハス凡ソ一体ト見做シタル
財産ノ一團)同視スルモノアリ或ハ共有財産ト見做スモノアリ(ミツテ
ルマイエル氏所著獨逸私法論第二百一十一節モーレンブレツヘル氏所
著獨逸私法論第七十三節ブツテル氏所著財産法第五十五葉レノ
ド氏所著獨逸法雜誌第九卷八十葉ゲルヘル氏所著獨逸私法論第五百
十一節ツァーヒム氏所著「マルク」共同組合論第三百十五葉ドゥンケル氏所
著共有財産法第六十五葉アイヒホルン氏所著獨逸土地買上法第百
六十八節ヒリツプ氏所著獨逸私法論第二卷第一章第八十五節及八十

六節レウ氏所著「マルク」共同組合法第四葉及第四十六葉ベセーレル氏
所著獨逸私法論第二卷第八十三節參照)

「マルク」境地使用ノ權ハ決シテ單ニ之ヲ私法上ヨリ考察スルコトアルヘ
カラス如何トナレハ此ノ權タル公同一般ニ屬スルモノニシテ公法中
ニ屬スヘキモノ數多ナレハナリ然レモ又此ノ權ヲ以テ共同ノ財産權
ト同視スルハ其ノ當ヲ得ス今「マルク」境地使用權ハ果シテ如何ナル
モノヨリ成立スルヤ否ヲ探究スレハ即チ左ノ如クナルヘシ

一、森林ノ樹木ヲ採取スル權(建築用併ニ薪炭材)

二、牧畜

三、獸獵及漁獵權

四、枯草採收權

五、草原礦山ノ使用及ヒ土石泥沙又ハ磁器練瓦製造用ノ膠泥粉土ヲ採
收スル權

六、公共ノ河水ヲ利用スルノ權

七、公共ノ橋梁道路ヲ使用スルノ權此ノ橋梁道路ノ保存ハ「マルク」組合員ノ負擔スル所ナリ

右等不動産ノ使用タル概テ無報酬ニシテ代價ヲ要セザリシト雖往々之ヲ競賣ニ付シ又ハ税金ヲ徵收セシメタルヲナキニアラス(モーレル氏所著「マルク」共同組合沿革史第百二十六葉「ランダウ」氏所著「國土沿革史」第百六十七葉「ドンケル」氏所著「共同財産法」第百六十二葉參照)

「マルク」ナル境地ハ斯ク各人各個ノ私有ニアラス又組合員ノ所有シ得ヘキモノニアラスシテ組合員ハ只々其ノ土地原野等ヲ利用スルノ權ヲ有セシニ外ナラザリシ證跡ノ顯著ナル者ヲ掲クレハ即チ左ノ如シ

〔第一〕「マルク」境地利用ノ權ハ畜ニ森林及牧野ニ止マラス獸畜隣介ヨリ河水道路等組合員ノ決シテ所有シ能ハサ

ルモノニ及ビタル事

〔第二〕本來「マルク」境地ノ利用ハ之レヲ各人ニ分割セス衆人共ニ此ノ境地ヲ利用シタリ而シテ後世ニ至リテ之ヲ分割シ各人ノ利用スヘキ境界ヲ定メタレ其ノ本旨タル決シテ各人各個ニ無形ノ所有權ナルモノヲ附與セルニアラス衆人ノ必要及「マルク」組合ノ利益ヲ考察シ各人各個ノ利用ニ適當ナル分量ヲ一定シタルモノニ過キザリシ事

〔第三〕「マルク」境内ニ於ケル職工等ハ正當ナル組合員ニアラサルモ尙ホ「マルク」境地ヲ使用シ就中共同地ヨリ其ノ製造原品ヲ採取スルノ權アリタリ尤モ之ヲ利用スルニ就テハ多少ノ制限ヲ受ケ且ツ其製造品ノ如キモ組合外ノ人ニ賣渡ス丁ヲ得ザリシヲ以テ常則トスレ其此ノ制

限ハ分割セル各人各個ノ所有權ヲ保護スル等ノ意ニ出
タルニアラス只タ土地保存者ノ利益ヲ保護スルノ意ニ
出タル事

「マルク」組合内ニハ尤モ必要ナル人員ノ職工ノミヲ存シ且ツ可成丈其
ノ數ヲ減少セント勉メタリ蓋シ當時ニ於テハ製造工業ハ只タ共同組
合社會ノ組織上附加ノ一分子ト見做シ農業社會中ニハ可成之レヲ制
限セリ(グリム氏所著獨逸古代法第五百二十葉モーレル氏所著マルク
組合沿革史第百十八葉參照)

〔第四〕右「マルク」境地内ノ職工ハ論ヲ待タス外國人ト雖亦
其ノ人々ノ必要ニ應シテ「マルク」境地ヲ利用スルヲ得タ
リシ事

(グリム氏所著獨逸古代法第五百十四葉參照)

〔第五〕「マルク」境地ノ利用ハ如何ナル定度マテ之ヲ許シタ

リヤト云ハ、主トシテ組合員數ニ比例シタルカ故ニ各
人私有ノ土地ト異ニシテ時々其ノ大小廣狹ノ變易アリ
タル事

〔第六〕一般「マルク」ノ土地ニ關スル新法ヲ創定シ及ヒ各人
各個ノ所有ヲ定ムルニ當リテハ各人各個ハ新ニ所有權
ヲ得有シタルモノニシテ從來所有ノ不動產ヲ分割シタ
ルニ止マラス二者併立シタリシ事

「マルク」境地ヲ各人ノ所有ニ分割スルト其ノ土地ノ使用ヲ各人ニ分割
スルトハ全ク別物ニシテ只タ土地ノ使用ヲ分割シタル場合ニハ其所
有ハ共同體ニ屬シテ各人ハ之ヲ賣與讓與スルヲ得サルナリモーレ
ル氏所著「マルク」組合法沿革史第百六十三葉參照)

〔第七〕「マルク」ノ土地ハ分割シテ之レヲ組合員ニ讓與スル
ト能ハサリシニアラス現ニ此ノ讓與ヲ爲シタル場合亦

少カラスト雖是レ只タ「マルク」組合ノ議決ニ由リ之ヲ讓
與シタルモノニ過キスシテ各人各個ハ敢テ之レヲ請求
スルノ私權利アリシニアラサリシ事

右ニ記載セル條々ヲ考察セハ「マルク」ノ土地ハ各人又ハ
組合員ノ私有ニアラサリシヲ知ルヘシ要スルニ「マルク」
ノ土地所有權ニ關スル原理ハ左ノ數項ニ過キサルナリ
〔甲〕「マルク」共同ノ土地ハ多クハ法律上無形人タル「マルク」
組合共同体ノ所有ニ屬ス

（ルンデール氏所著獨逸私法論第百八十一節附論第四參照）

〔乙〕「マルク」土地使用ノ權ハ各人各個ニ屬スル權利ナリシ
ヲ以テ此ノ權利ハ全ク他ヨリ讓受ケタル權利ニ過キス
故ニ此ノ權利ノ得喪及ヒ此ノ權利ヲ行フノ方法範圍等
ニ就テハ組合共同体ノ制限ヲ受ケタリ

「マルク」ノ土地使用權ハ「マルク」外ノ人ニ之レヲ許容シ又ハ外國人ニ讓
與スルコトヲ得サルノミナラス此ノ使用權ヨリ出セル物品ハ許可ナク
シテ輸出シ又ハ「マルク」外ニ於テ賣買讓與スルコトヲ得サリシナリ（モ
レル氏所著「マルク」共同組合沿革史第百七十九葉參照）

「マルク」組合ノ不動産法カ共同ノ性質ヲ帶ヒタル狀ハ殆ント市邑ノ
組織ニ由リテ規定シタル不動産法ト一般相類似セルカ故ニ羅馬法ノ
地役主義ノ原理ハ之ヲ茲ニ適用スヘカラス（ワディヒム氏所著共同組合
法第三百十五葉參照）

〔丙〕「マルク」土地使用權ハ單ニ組合共同体ノ本性ヨリ發生
セル人權ニアラサルカ故ニ如何ナル場合ニ於テモ常ニ
之ヲ混同スルコトナカリシ

第三百三十節 共同組合ト市邑團結トノ關係

「マルク」共同組合ハ後世概テ市邑團結ニ變性シタレト「マ

ルク「共同組合ハ盡ク市邑團結ノ性質ニ移リタルモノニアラス如何トナレハ」マルク「共同組合ノ團結ト市邑團結トハ素リ同一物ニアラサレハナリ

(レナウド氏所著獨逸法雜誌第九卷第一葉ゲルヘル氏所著獨逸私法論 第五十一節參照)

市邑團結ハ一地方住民カ地方一般ノ利益ヲ同フスルヨリ發生シタルモノニシテ其ノ地方ノ利益ヲ満足スルカ爲メニハ百般ノ事務ヲ以テ總テ其ノ範圍ニ屬セシメシト雖「マルク」共同組合ハ土地保有者ノ團結ニ過キサリシヲ以テ其ノ法律上ニ於ケル性質モ亦土地ノ適當ナル改良進歩ニ屬スル利益ノ共同一致ヲ得ルニ必要ナル範圍ヲ超過スルトヲ得サリシナリ故ニ「マルク」共同體ニ於ケル組合的ノ原素ハ市邑團結ニ於ケル社會的ノ原素ニ比

スレハ頗ル僅少ナリ如何トナレハ苟モ市邑タル以上ハ決シテ市邑中ノ一種民ノ必要如何ヲ顧ルトアルヘカラサレハナリ故ニ今日ニ方テモ農業團集ハ村邑團結ト全ク別物ナリトス

商人、工業者、職工等ノ集合ニ成リタル會社ハ決シテ之レヲ市邑團結トスルコトヲ得ス此ノ理ト同シク只タ社會中一種族ノ利益ノミニ關スル團結ハ市邑タルノ性質ナシ(本書前第九十九節參照)

然レモ「マルク」共同組合及市邑團結ノ事項ハ相互ニ牽連一致スルコトナキニアラサレハ下ニ論スル所ヲ以テ明カナリ設令ヘハ地方ノ市邑團結ニ於テハ土地ヲ所有スル住民又ハ一家屋ヲ有スル者ニアラサレハ撰舉權ヲ附與セス又タ政治上ノ責任(公務ニ服スルノ義務)ノ如キモ家屋所有者ニ之ヲ限リタルカ如キ皆ナ「マルク」共同組合ト市邑團結ト牽連一致スルノ故ナリトス(ワイスマー氏所著市邑財產及其ノ使用論第

五十三葉及第七十六葉スチューパー氏所著邑法第二十四葉及第二十九葉普國國法全典第二卷第七章第二十九節ツディヒム氏所著共同組合法第二百三十八葉參照

斯ク「マルク」共同組合ト市邑團結トハ其ノ境土モ諸事務モ相符合シテ分離スヘカラサルモノニアラサルヲ以テ一ツノ「マルク」共同組合ノ境域中ニハ數多ノ市邑モアルヘク或ハ之レヲ數市邑ニ分割スルヲ得ヘシ故ニ一箇ノ「マルク」組合員ハ數多ノ市邑所屬民ヨリ成立セルトナキニアラス

(ツディヒム氏所著共同組合法第二百二十六節及ヒ第三百三十二節參照)

故ニ「マルク」境地ノ使用權ハ市邑團結ニ基キテ必然發生シタル所ノ結果ニアラサルノミナラス市邑團結ノ活動次第ニ其ノ範圍ヲ増進シテ農業組合團結(マルク組合)ノ

制限ニ遠カルニ從ヒ「マルク」境地使用ノ權利ハ次第ニ單純ナル私權利タルノ性質ヲ固フシ市邑議決ノ成規ヨリ獨立スルニ至レリ然レ「マルク」不動產法ノ發達ハ左ニ揭示スル所ノ二様ノ事情アリテ之レカ一大障礙ヲ來シタリ

〔第一〕「マルク」共同組合ト市邑トハ其ノ間判然ノ區別アリテ混同スヘカラサルモノナレ「實際」ノ活動ニ於テハ全ク理論上ノ區別ヲ嚴守スルト能ハス現ニ市邑ハ「マルク」共同組合ノ變性シタルモノ多キカ故ニ共同ノ土地山林ノ如キハ「マルク」共同組合ノ議決ヲ以テ其ノ全部又ハ一部ヲ純粹ナル市邑ノ目的ニ流用スルヲ得タルノミナラス殊ニ地方ノ村邑ニ於テハ農業上ノ利益ノ爲メ此ノ流用ヲ爲スヘキ必要ヲ生スルノ場合極メテ多カリシナ

リ故ニ此ノ流用ヨリシテ本來ハ共同ノ土地山林ナルモ
實際市邑ノ財産ト爲リ市邑一般ノ人民ニシテ之ヲ利用
スルモノモ亦市邑ノ財産トシテ之ヲ利用スルニ至レリ
然レ此ノ種ノ土地ト共ニ組合中ノ一種族ノミ特ニ使
用スルトテ得ヘキ土地使用權モ亦併存シテ敢テ全廢ニ
歸シタルニアラサルハ勿論ナリ之ヲ土地使用權利カ純
然タル私權利タル性質ヲ帶フルニ至ヘキ發達進步ヲ妨
害シタル第一事情トス

「マルク」共同組合カ市邑團結ニ變性スルノ一助ヲ爲シタルモノハ「マル
ク」共同組合内ニ於ケル警察權トス蓋シ「マルク」ノ警察權ハ山林、河、水、道
路、橋梁、建設物等ヲ監察シタリシカ故ニ後世ノ所謂山林警察、建築警察、
火災警察、水上警察、營業警察等適當ニ市邑ニ屬スヘキ警察權ニ變性ス
ルハ極メテ容易ナリシナリ（モーレル氏所著「マルク」共同組合沿革史第

三百〇六葉參照

共同ノ土地山林ノ變性シタル市邑財産及「マルク」中一種族ノミ特有ス
ル土地使用權ハ相互ニ併立シタリシカ故ニ今日ニ於テモ市邑財産中
ニハ其ノ種類ノ相異ナル者甚々多キヲ見ルヘシ（本書前第百十四節參
照）

〔第二〕地領主統括ノ勢成リ警察主義ノ行ハル、時期ニ及
ヒテヨリ主治者タルノ權力及ヒ一般ノ幸福ヲ理由トシ
テ共同ノ土地山林ハ盡ク之レヲ市邑ノ目的ニ供スルニ
至レリ

本來ハ「マルク」共同組合ノ手中ニ存シ且ツ其ノ吏員ノ權内ニ屬セシ「マ
ルク」組合ノ諸事務ハ地領主統括ノ勢成ルニ從ヒ次第ニ消滅シテ罰金
ノ制及ヒ山林、獸獵、警察等ニ變性シ迷ニ「マルク」共同組合員ハ盡ク地領
主ノ統括保護ノ下ニ歸シタリ（モーレル氏所著「マルク」組合法沿革史第

四百二十五葉參照

故ニ本來共同ナリシ土地山林モ遂ニ其ノ性質ヲ失ヒテ地領主ノ所有ニ歸スルニ至レリ

(モーレル氏所著マルク共同組合法沿革史第四百四十葉參照)

本來マルク共同組合ニ屬セシ山林ノ變シテ國家ノ山林トナリシ方法モ亦本文説ク所ト同一ノ方法ニ出テタリ

第二款 地主統括

第三百三十一節 地主統括ノ本性

地主統括團結ハ一領主ノ配下ニ屬スル土地占有者ノ結合ニシテ其ノ團結員ハ耕作ノ目的ヲ以テ領主ノ地内ニ定住セル者ナリ

(ミツテルマイエル氏所著獨逸私法論第八十四節ワルテル氏所著獨逸法律沿革史第一卷第二百七十九節モーレル氏所著獨逸土地及耕作團

結沿革史第四卷第一葉フンメル氏所著耕作法論第二卷第二百六十七葉ヨリ第四百二十八葉迄參照)

地主統括團結ノ法律ハ領主ノ管轄ニ屬スル土地ト其ノ地内ニ居住スル人民トノ二者ニ關スルモノヲ包含シ其ノ初メニ於テハ領主ノ隨意ニ制定セル所ナリシモ後世ニ至リテハ慣習ニ依リテ養成セラレ而シテ團結員カ自治ノ行政及司法ノ權力ヲ以テ之レヲ固定セルモノニ係ル

統括團結ノ司法權ハ單ニ土地所有權ニ發生シタル結果ニアラス又タ共同團結ノ本性ニ起因シタルモノニアラスシテ地領主及ヒ其ノ土地使用者即チ所有主ニアラサル占有者ト共同シテ此ノ司法權ヲ使用セリ故ニ此ノ事ニ於テハ地主統括ノ司法權ハマルク共同組合ニ於ケル司法權ト酷々相ヒ似タリ(ワルテル氏所著獨逸法沿革史第一卷第二百

七十九葉モーレル氏所著獨逸土地及耕作團結沿革史第二卷第四百八十四葉參照

然レ地領主ガ其ノ配下ノ自由ナキ臣民ニ對シ單ニ人身上ノ隸屬ニ關スル固有ノ裁判權ハ前記ノ地主統括團結ニ於ケル司法權ト其ノ性質ヲ異ニセリ

斯ク地主統括團結ノ法律ハ土地ト其ノ住民トノ二者ニ關係ヲ有シタリ如何トナレハ此ノ團結ハ領主ノ土地ヲ耕作スル者ノ結合ナレハ其法律ハ一方ニ於テハ一定ノ土地ニ關係ヲ有シ一方ニ於テハ耕作人(即チ土地占有者)カ其ノ地領主ニ對シ其ノ耕作人ノ自由民ナルト否トニ從ヒ忠節ト服從(隸屬)トヲ盡スヘキモノナルヲ以テ人ト土地トノ關係ノミナラス人ト人ト人身上ノ關係ヲ有セサルヘカラサレハナリ故ニ地主統括ハ其ノ土地ニ關ス

ル制限ヲ設ケタルノミナラス又々人身ニ關スル制限ヲ設ケタリ然レモ耕作人即チ土地占有者ハ此ノ組合團結タル權利ヲ以テ團結ノ事務ニ關シテ團結ノ議會ニ出席スルノ權ヲ有シタリ

(ワルタル氏所著獨逸法沿革史第一卷第二百零七十九節モーレル氏所著獨逸土地及ヒ耕作團結沿革史第四卷第四十九葉參照)

故ニ獨逸ノ地主統括即チ地領主ノ配下ニ屬スル耕作者ノ結合團結ノ法律ハ單ニ土地ニ關スル權利設例ヘハ「エムフヒチユーズ」按荒地ノ所有者ガ永世又ハ定期間之ヲ他人ニ讓與シ而シテ此讓受人ハ之レヲ耕作開拓シ且ツ所有者ニ年々借地料ヲ拂フヘキ旨ノ條件ヲ盡スヘキモノナレモ讓受人ハ又々之レヲ他人ニ讓渡スヨリ得ル一種ノ財產權ニシテ全ク土地上ノ關係ニ生スル權利ナリ又ハ「コロナト」下等ノ耕作人ノ有スル地上權等ノ如キ羅馬財產法ノ制度ト全ク其ノ性質ヲ異ニセリ

廣義ニ於テハ耕作權トハ借地ノミナラス各自ノ所有地ヲ耕作スル權
ヲモ包含スル一テ一氏所著獨逸私法論第四百八十一節第四百八十二
節及第五百二十三節參照)

然レモ一般ノ意義ニ於テハ耕作人(農夫)トハ土地ヲ耕作スル者ヲ指シ
耕作ハ即チ土地ニ對スル勞働ナリトス故ニ古代ノ獨逸法ニ於テハ耕
作權中ニハ土地ニ對スル勞働ヲ包含スルモノトシ勞働ト占有トハ同
時ニ成立スレド此ノ占有ハ甚シキ責任ヲ負擔セリ
ベゼーレル氏ハ單純ナル理論ニ依リ耕作權ト借地トハ全ク別物ニシ
テ一致スヘキモノニアラズトセリ

(同氏著獨逸私法論第三卷第百八十三節)

故ニ又々地主統括團結ノ法律ニ依リ其ノ配下ノ借地上
ニ負擔セシメタル義務又ハ附與シタル權利ハ之ヲ羅馬
法ノ物上權又ハ法鎖上ノ權利義務ト同視シ茲ニ其ノ原

理ヲ適用スルカ如キハ素リ誤謬ノ見タルヲ免レヌ

設例ヘバゲルベル氏ノ如キハ其ノ著書獨逸私法論ニ於テハ獨逸法ノ
耕作權ヲ論スルニ羅馬法ノ財產權ノ原理ヲ以テシ獨逸ノ耕作者ヲ以
テ羅馬ノ土人ト同視セリ

之レニ反シテ右等ノ權利ハ全ク自立ナル團結的ノ性質
ヲ帶ヒ地領主ト其ノ配下ノ人民(即チ勞役者)トノ間ニ於
ケル人身上共同ノ思想ニ基キタルモノナリトス故ニ斯
カル人ト人トノ關係ニ基キタル共同ノ精神漸ク消滅ス
ルニ從ヒ其ノ已得ノ權利ハ私慾ノ爲メニ次第ニ其ノ範
圍ヲ擴張シ領主ニ對セル内部ノ義務ヲ減殺シ漸々各人
各個ノ獨有スル私權利私義務ノ性質ヲ帶フルニ至レリ
而シテ土地ニ關スル各人各個ノ權利義務ノ發達已ニ之
レニ達スルニ及ヘハ地領主ニ隸屬服從スルノ精神モ亦

遂ニ近世社會法上ノ眞理ノ爲メニ除却セララル、ニ至レ

第三百三十二節 土地ニ對スル地領主ノ權利
地主統括ノ下ニ在リシ土地家屋ニ關スル財産權ハ左ノ
權利義務ヲ包有セリ

〔第一〕地主統括ノ財産法ハ土地占有者ニ許與スルニ私權
利ヲ包含セル多少ノ占有權ヲ以テセリ故ニ此等私權利
ノ何物タルヤ決シテ之レヲ本末ノ共同ナリシ占有權ノ
性質ヨリ推論スルト得サルナリ(本書以下第百十三節
參照)

〔第二〕又タ右占有ノ私權利ニ附着シテ永存スヘキ義務ナ
ル者アリ地主統括團結ノ保全利益ノ爲メ借地人ヲシテ
常ニ之レヲ負擔セシメタリ

一般ニ之ヲ論スルトハ借地即チ他人ノ所有ニ係ル耕作地ヲ占有スル
者ハ之レヲ開墾耕作シ且ツ地主ニ對スル義務ヲ盡サ、ルヘカラサル
モノトス

右等借地人ノ負擔セル義務タル決シテ之レヲ同等ナル
人々ノ間ニ發生セル物上權又ハ對人權ト見做ストアル
ヘカラス蓋シ他人ノ所有ニ係ル所ノ土地ヲ耕作スルト
アラハ必然此ノ土地ニ固着スヘキ權利ヲ發生シ同時ニ
人身上ノ隸屬(人ト物トノ關係ニアラスシテ人ト人トノ
關係上地主ニ隸屬スル事)ヲ發生スルハ日耳曼法律ニ固
有ナリシ性質ナリトス然レ此ノ人身上ノ隸屬タル羅
馬法ニ固有ナリシ奴隸ノ制ト大ニ其ノ趣ヲ異ニシ羅馬
ノ法律ニ於テハ奴隸ニ權利ヲ得有スルトヲ禁シタルモ
日耳曼法ニ於テハ右ノ隸屬ト共ニ却ツテ權利ノ得有ヲ

許セリ

(ブルンチヨリ―氏所著國家學韻府第一卷第七百七十九葉ギールケー氏ノ説參照)

獨逸不動産法ノ性質タル斯ノ如クナリシカ故ニ此ノ性質ヨリシテ數多ナル法律上ノ諸結果ヲ發生セリ今マ其ノ大綱ヲ掲クレハ左ノ如シ

〔第一〕地領主ハ其ノ領地ヲ占有スル耕作民ニ對シテ人身上ノ統括權ヲ行ヒ耕作民ハ又其ノ保護ヲ仰キタリ但シ自己所有ノ土地ニ住スル自由民ハ普通法ノ管轄保護ニ屬シタリ

(モ―レル氏所著借地法沿革史第三卷第十二葉參照)

〔第二〕地領主ノ更迭若クハ土地占有者ノ變更アルニ際シテハ土地占有者ハ其ノ地主ニ對シテ盡スヘキ服從ノ義務ヲ新ニシ往々宣誓ノ式ヲ用ヒテ之ヲ保固ナラシメタルノミナラス數々讓受料ヲ上納セリ

(ゲルヘル氏所著獨逸私法論第四百十三節參照)

〔第三〕借地ニ於ケル漁獵水利採礦等凡テ自由人ノ特權ニ屬スル權利ハ盡ク地領主ニ屬シタリ

(モ―レル氏所著借地法沿革史第三卷第十二葉參照)

〔第四〕地領主ハ單ニ團結体中ノ一員ニアラスシテ兼テ又其ノ首長タリシカ故ニ借地人即チ土地占有者カ權利ヲ得有シ得ヘキ資格ノ制限ヲ受クルトナク地主ノ自ラ耕作セル土地ハ一般ノ借地耕作人ノ負フヘキ義務責任ヲ有セサリシナリ

(ハーゲマン氏所著耕地法必携第八十三節乃至第八十八節ルンター氏所著獨逸私法論第四百十五節及ヒ第五百二十三節クリンゲル氏所著

耕地法纂集第三百七十六葉モーレル氏所著沿革史第三卷第十二葉ゲルベル氏所著獨逸私法論第九十四葉附論第四參照)

故ニ土地借地法ヨリ發生シタル諸種ノ權利ハ地主統括
共同體ノ本性ニ基キ地主ト耕地耕作民トノ關係ヨリ論
スヘキモノニシテ單ニ私法上ヨリ之ヲ論及スヘキモノ
ニアラストス而シテ又斯ノ如キ地主ノ特權アルヲ見テ
往々之レニ最上所有權ノ名義ヲ下スモノナキニアラサ
ルモ此ノ名義ハ又數々誤見ヲ來スノ原因タルヲ免レス
(アイヒホルン氏所著獨逸法初歩第六十節ルンデー氏所著獨逸私法
論第二百六十四節ヒサツプ氏所著獨逸私法論第二卷第八十七節第二
十葉ゲルベル氏所著獨逸私法論第七十七)

第三百三十三節 土地ニ對スル借地人ノ權利
借地耕作人即チ土地占有者カ其ノ土地ニ對スル權利ヲ

大別シテ左ノ二種トス

- 第一 世襲ノ占有權
- 第二 有期又ハ無期ノ耕作權

(ルンデー氏所著獨逸私法論第四百八十四節及第五百二十三節スタイン氏所著行政學第三百三十六節參照)

右二種ノ權利中又各々差等種類アリテ一樣ナラスト雖
其ノ之レヲ大別シテ二種ト爲スノ妨トナルトナシ

茲ニハ只々大別シテ二種トスレモ其各種中ニモ亦種々ノ等級名目アリ(ゲルベル氏所著獨逸私法論第八十節第三百三十九節ルンデー氏所著獨逸私法論第五百二十四節モーレル氏所著借地法沿革史第三卷第二百十八葉ベゼーレル氏所著獨逸私法論第三卷第八十四節參照)

〔第一〕第一種ノ權利ヲ有スル耕作人ハ羅馬法ノ所謂完全ナル所有權ヲ有セサルモノナリシト雖其ノ各自ノ土地

ニ付テハ確定シタル處分權及ヒ耕作權ヲ有シ私法上ノ關係ニ於テハ實際所有權ト同一ナリシナリ故ニ或ハ此等ノ制限ヲ以テ殆ント今日ニ於ケル社會法ノ制限ト同視セハ此等ノ耕作民ハ其ノ土地ノ所有權ヲ有シタルモノトスルト得ヘシ今マ此等制限ヲ枚舉セハ大凡左ノ如シ

(甲)此ノ權利ハ確定シタル法則ニ基キタル相續權ニシテ通常男子ハ女子ヲ超ヘテ先ツ相續スルノ權ヲ有シ且ツ此ノ財產ハ分割シテ之レヲ相續スルト得テ許サス

(ケルベル氏所著獨逸私法論第二百五十三節參照)

(乙)土地ハ常ニ耕作シテ間斷ナカルヘカラサルカ故ニ所有者ノ身體不具等ニシテ耕作ヲ爲スト能ハサル場合ハ代理者ヲシテ之レヲ耕作セシムルノ權アリ之レヲ代理

耕作權ト云フ

此ノ代理耕作人ハ單ニ本人ノ代理人又ハ後見人タルニ止マラス一定ノ年限間ハ土地相續者ノ代表者ニテ現ニ一耕人タル獨立ノ權力義務ヲ有シタリ(ケルベル氏所著獨逸私法論第四百一十一節參照)

(丙)耕作人ハ其ノ財產ノ全部又ハ幾分ヲ他人ニ讓與スルト得レド只々地主ノ承諾アルヲ要シ且ツ地主ハ常ニ先買權ヲ有シ地主ニシテ自ラ之レヲ買取ラント欲セハ之ヲ他人ニ讓與スルト得ス

讓受人ニシテ耕作ヲ爲シ得ヘキ資格アラハ地主ハ其ノ讓渡ヲ拒ムトヲ得サルヲ以テ通則トス(ケルベル氏所著獨逸私法論第四百十節參照)

(丁)土地ノ質入モ亦其ノ地主ノ承諾ヲ要スレド耕作人ノ負債ニ對シテ各自ノ私有ニ係レル土地ノ外其ノ責ヲ負フナシ

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第四百十節參照)

右等ノ制限アリト雖爲メニ耕作人ニ土地ノ私有權ナキ
モノトスルコトヲ得ス如何トナレハ斯カル制限タル警察
主義ノ盛ナリシ時代ニ於テハ主權者ノ常ニ設立セル所
ナレハナリ

土地ヲ賣買讓與スルノ自由ナキヲ以テ其ノ土地ノ私有權ナシトスル
コトヲ得スト雖耕作ノ不充分地主ノ承諾ナキ讓與等ノ場合ノ如キ地主
ニシテ其ノ土地ノ耕作人ヲ退去セシメ得ルノ權ニ至リテハ眞ニ耕作
權ヲ制限スルモノト云フヘシ而シテ此等ノ特權ハ常ニ法廷ニ於テ之
レヲ適用スヘキモノニシテ地主ノ濫リニ專斷シ得ヘキモノニアラヌ
(ゲルベル氏所著獨逸私法論第八十一節及第四百四十三節ルンゲ―氏所
著獨逸私法論第五百三十四節參照)
又右等ノ制限タル地主統括團結體ノ本性ニ基クモノニシテ恰モ後世

ニ至リテ警察權代ツテ此ノ制限ヲ施シタルト同一理ナリ

〔第二〕第二種ノ耕作人ハ其ノ土地ニ付キ世襲ノ占有權ヲ
有セス無期(何時ニテモ之レヲ取上ケ得ルモノ)又ハ有期
ノ年限内(一定ノ年限又ハ地主若クハ耕作人ノ一生間)地
主ノ土地ヲ使用スルノ權アルノミ

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第四百四十二節及ヒルンデ―氏所著獨逸私

法論第五百二十四節參照)

然レ氏第二種ノ耕作人モ第一種ノ耕作人ト等シク耕作
權ヲ使用シ其ノ間差等ナカリシカ故ニ第二種ノ土地ハ
世襲シ得ヘキモノニアラストスルノ法則ハ只タ有名無
實ノ姿トナリ法律ニ於テモ亦其死者ノ財産ヲ沒收スル
ヲ拒ミタルカ故ニ實際第一種ノ土地ト異ナルコトナキニ
至レリ

(ゲルベル獨逸私法論第四百二十二節參照)

第三百三十四節 借地民ノ義務

耕作地占有者カ其ノ地主ニ奉スルノ責任ハ徭役及ヒ物品若クハ金錢ノ上納ニシテ之レヲ總稱シテ「レアラスト」ト云ヒ徭役ヲ庸ト云ヒ物品ノ上納ヲ調ト云ヒ金錢ノ上納ヲ地租ト云フ

(ソイツヘルト氏所著耕地法、隣地法及「レアラスト」法、シユワルツ氏所著「レアラスト」法、モーゼル氏所著ウルテンブルヒ地租法、リユンツエル氏所著ヒルテシユ地租法、ステューベ氏所著同上、ドユンケル氏所著レアラスト論、ナード氏所著同上、ヒユルマン氏所著佛普地地稅法沿革史、ミツテルスイエル氏獨逸私法論第一卷第七十二節乃至第九十九節、モーレンブレヘル氏所著獨逸私法論第一卷第六百五十九葉、ヒリツプ氏所著獨逸私法論第一卷第六百二十六葉、ゲンケレル氏所著獨逸

私法論第一卷第二百八十五葉、ゲルベル氏所著獨逸私法論第一卷第八十六節及ヒ第百八十九葉參照)

調ハ凡テ耕作地ニ於テ產出又ハ製造シタル物品ニシテ或ハ一定ノ量ニ依リ或ハ十分稅ノ如ク其收穫高ニ比例シテ之レヲ納メシメ地主ノ一身上又ハ經濟上ノ需用ニ供ス又地租ハ時々ノ財產ノ多寡ニ應シテ定メタル受讓料(第百三十二節)若クハ社寺寄附(第百三十六節參照)ノ如ク常ニ一定シタル額ナシトス然レモ其ノ始メヤ土地ノ廣狹ニ從ヒ法律上之ヲ固定シタルモ地主ト耕作人トノ契約ノ性質ニ從ヒ之ヲ變更スルヲ得タルヲ以テ常ニ一定不變ノ標準ヲ得ルヲナシ所謂一定不變ノ義務ナル者ハ其ノ區別蓋シ茲ニ基ケリ

(ワルテル氏所著獨逸法沿革史第四百二十八節參照)

又徭役ニ人馬二者ヲ區別シ人夫ノ徭役ハ更ニ男女ノ二者ニ區別セリ

右等ノ調租徭役ハ一定ノ方法ナク又其ノ目的ナクシテ之ヲ徵收シタルモノニアラス必スヤ一定シタル地主ノ必需及ヒ責任ヲ充タスカ爲メニシテ此等ノ目的タル納税ノ義務如何ンニ付キ特ニ裁判上重要ノ關係ヲ有シタリ今マ調租徭役ヲ徵收スヘキ必要ノ場合ヲ枚擧スレハ即チ左ノ數項ニ歸ス

(デキケール氏所著郡村法第二卷第七章モーレル氏所著借地法沿革史第三卷第二百三十三葉參照)

〔第一〕地領主ノ家計ニ必要ナル調庸

〔第二〕地領主及ヒ諸官吏ノ司法上ノ費用ヲ拂フヘキ調庸

〔第三〕地領主ノ施政上ニ必要ナル庸役

(モーレル氏所著借地法沿革史第三卷第二百八十七葉クリンクテル氏所著郡村法類集第一卷第三百三十八葉參照)

〔第四〕地領主ノ土地ヲ耕作スルニ必要ナル物品及徭役肥料農具牆垣樹木等ノ供給耕籽播種收藏等ノ農事ニ服役スルノ類ヲ云フ但シ地領主役夫ノ衣食ヲ供スヘキモノトス

〔第五〕借地權ノ保護就中借地人ノ人身上ノ服役ニ就テノ税金

(ルンデー氏所著獨逸私法論第五百〇七節モーレル氏所著借地法沿革第三卷第三百二十一葉參照)

以上數種ノ調庸ハ其ノ物品及ヒ徭役ニ換ユルニ金錢ヲ以テスルヲ得其ノ對手ノ承諾ナキトキト雖亦同シ
(ルンデー氏所著獨逸私法論第五百〇一節及ヒ第五百〇七節參照)

上來論述シタル地領主ニ屬スル「レアラステン」ノ事跡ヲ
通覽セハ右等ノ調租徭役ハ土地ト密着シテ地領主統括
團結的ノ性質ニ基キ專ラ農業ニ從事スルヨリ發生セル
モノニシテ從ツテ小境區内ニ閉居シ且ツ人身上ノ束縛
ヲ受クルカ故ニ商業經濟及ヒ交通ニ關スル性質ヲ欠キ
タルモノナルヲ知ルヘシ要スルニ「レアラステン」ハ農業
經濟時代ニ發生スル結果ニシテ一區ノ土地ニ固着シテ
之レヲ耕作スル人民ノ農業上ノ實務及ヒ人身上ノ隸屬
ノ二者ヲ以テ其ノ本分ノ性質トスルモノナリ

第三百三十五節 「レアラステン」

「レアラステン」ハ地役セルビチユドニアラス法鎖オシラガレロシニアラス又タ物權及
ヒ法鎖ノ原素ヲ混和シタル集合物ニアラス故ニ「レアラ
ステン」ハ其本原ニ於テ私法ニ屬スヘキモノニアラサル

ヲ以テ若シ實際上之レヲ私法上ヨリ論及セントスルモ
決シテ其ノ明解ヲ得サルハ其ノ沿革ノ事跡ニ徴シテ昭
々タリ

「レアラステン」ノ本性如何ニ關スル諸種ノ論說主義ニ就テハ「ワルナル」
氏所著獨逸私法論第四百十八節ゲルベル氏所著獨逸私法論第一卷第
二百八十六葉エルマン氏所著獨逸レアラステン「法論ワイヒセル」氏所
著獨逸地主統括史第一卷第二章第二卷第一章ワイスキー氏所著獨逸
地主統括論第七十六節及ヒプフタ氏所著羅馬法第二卷第二百五十二
節附論第四參照

古昔ノ理論ニ於テハ「レアラステン」ハ地領主ト借地人トノ間ニ成リタ
ル服役契約ニ發生シタル者トセリ是レ未タ事物ノ全體ヲ盡サ、ル誤
見ナレト近世ノ羅馬法學派カ架空ノ理論ヨリ尙ホ眞ニ近シト云フヘ
シ蓋シ羅馬法ニ於ケル地役及ヒ其ノ物上權ヲ以テ「レアラステン」ノ本

性ヲ論スヘキモノニアラサルナリ(ルンデ―氏所著獨逸私法論第四百九十一節ハイチンウス氏所著日耳曼法原理第二卷第五章第三百一節及ヒ第三百二十二節參照)

(沿革上ノ事跡ニ就テハブフタ氏羅馬法第二卷第七百七十六葉參照)蓋シ「レアラステン」ハ土地ノ占有ニ附屬スル庸租ニシテ借地法ニ從ヒ整理セラレタルモノナルカ故ニ中世ニ於テハ人身自由ノ社會法ノ原理ニ從ヒ土地ノ占有ト勞力トノ關係ハ八身上ノ隸屬ナリト見做シ而シテ此ノ人身上ノ隸屬ハ共同組合團結的ノ土地占有ノ關係ニ基キタルモノトセリ

社會法ニ於テハ勞力ハ財産ニ對スル使役中ニ屬スレドモ勞力ヨリ生スル利益收獲ト勞力ノ報酬賃銀ニハ其ノ間素リ區別アリテ存ス然レドモ單ニ此等財産物件上ノ事項中ニ人身ヲ包含スルナク近世ノ所謂勞

役カナルモノハ資本家ノ配下隸屬ニアラスシテ資本家ト同シク一個ノ自由人ナリ尤モ勞力ヨリ生スル收益ヲ以テ勞力者ト所有者ノ間ニ配分スルハ今日ニ於テモ存スル所ナレドモ「レアラステン」ノ形狀ニ於テ財産ヨリ生スル收益ヲ以テ耕作人ト所有主トニ配分スルハ二者ノ間先ツ人身上ノ統括隸屬アツテ而シテ後初メテ生スヘキ事項ナリトス蓋シ「レアラステン」ハ耕作人タル身分上ノ隸屬ヨリ生シ二者ノ合意ニ出テタルモノニアラサルナリ

ゲルベル氏カ「レアラステン」ヲ以テ一般ニ地主統括權ト其ノ配下ノ人民トノ關係ヨリ發生セルモノトセルハ其事實素リ正確ナリト雖其ノ公法上ノ性質アル所以ヲ忘却シ私法上ヨリ之レヲ論及スヘキモノトセルノ論局ニ至リテハ即チ誤レリ要スルニ「レアラステン」ハ耕作民ノ隸屬ニ基キ社會進化ノ原理ニ反シタルモノナレドモ町村團結法ノ發布ヲ以テ「レアラステン」ヲ廢止シタルノ事ヲ以テ全ク之レヲ私法上ヨリ

論スヘキモノトスルハ誤謬ノ甚シキモノタリ(ゲルベル氏所著獨逸私法論第百六十九節參照)

要スルニ土地ノ占有權ヲ讓與シ其ノ占有者ヲシテ人身上地主ニ隷屬セシメ地主ヲシテ獨リ土地ニ對スル全權ヲ有スルニ止マラシメサリシハ「レアラステン」ノ制度ニ普通ナル著大ノ原素ナリ

「レアラステン」ノ制度ニ於テ占有者ノ隷屬ハ人身上ノ關係ナリシハブルンチユリ―氏カ其ノ著書獨逸私法論(第一卷第九十節)ニ於テ論スル所ノ如クニシテ地主ハ其管轄ヘ屬スル土地ニ對シテ最高ノ權力ヲ有シタルハ勿論ナレトモ此ノ權力ハ管ニ其ノ土地上ノミニ止マラスシテ人身上ニ及ヒタリ然レトモ此ノ隷屬タル素リ主トシテ土地物權上ノ關係ニ存シタルハ疑ヲ容レサル事實ニシテ中世ニ於ケル借地人ノ權利ハ常ニ土地不動產ト密着セルハ史上ニ昭々タル所ナリ

新ニ借地ヲ得タル占有者ハ同時ニ地領主統括ノ團結員トナリ地領主ニ對シテ服從スヘキ旨ヲ宣誓スルヲ以テ當然トスレトモ借地法ニシテ漸ク其ノ共同組合的ノ性質ヲ脱スルニ從ヒ借地占有權ノ賣買讓與モ次第ニ其ノ數ヲ増シ自由ナル都人士ニシテ借地占有權ヲ讓受クルモノアルモ國法ニ於テ敢テ之ヲ拒ムコトナキニ至リテ人身上隷屬ノ制度漸ク弛廢ニ歸スルニ及ヒタリ(モーレル氏所著借地法沿革史第四卷第四十九葉參照)

斯ク「レアラステン」ハ人民ノ勞役ニ由リテ廣大ナル土地即チ自由ナル土地ノ占有ヲ使用スルカ爲メニ設ケタル中世ノ法律ナリ故ニ只々廣大ナル土地ノ占有者ノミ獨リ一般普通法ノ保護ヲ受クルニ止マリシカ故ニ狹小ナル土地占有者ヲ保護シ其ノ永續保存ヲ爲スカ爲メニハ借地法ナルモノヲ設ケ同時ニ之レニ幾多ノ責任ヲ負擔

セシメサルヘカラサルニ至レリ
借地耕作人ハ庸役調租ニ關スル特別ノ制規ニ服スルノミナラス又々
地主統括ノ安全ニ對スル責任ヲ實行セサルヘカラス而シテ此等ノ責
任ハ後世地方警察權ニ對シテ行フヘキモノトナレリ(ゲルヘル氏所著
獨逸私法論第四百十節參照)

此借地法ハ當時尙ホ未ダ一般ノ文化洽チカラス生産事
業モ亦甚ダ進歩セサリシニ關ハラス土地耕作ニ從事ス
ル勞役者ヲシテ人民一般ノ需用ヲ充タスニ足ラシメ而
シテ尙ホ勞役者ノミヲ單ニ勞力ノ器械タル程度ニ陷ラ
サラシメントイヲ務メタルノミナラス勞力ト土地占有ト
ノ密接ノ關係ヲ保存シ且ツ自由ナル土地占有民ヲシテ
其高度ノ生計ヲ満足セシメントセリ故ニ「レアラスタン」
ハ公ケナル性質ヲ有シ私シノ契約ヲ以テ之ヲ創設若ク

ハ廢滅スルトヲ得ス從テ又其ノ起源變遷及廢止モ亦私
法ノ制規ヲ以テ之ヲ論スヘキモノニアラス

「レアラスタン」ハ契約ヲ以テ之レヲ創設廢滅スルトヲ得サリシカ故ニ
其ノ之ヲ爲スニハ本來ハ組合團結ノ裁判廳ノ共同作用ニ出テ後世ニ
ハ地方官署ノ許可ヲ要セリ(ルンデー氏所著獨逸私法論第四百九十一
節及ヒ第五百〇八節參照)

故ニゲルヘル氏同氏所著獨逸私法論第六十八節附論第四ノ如キレ
アラステン」ノ廢止ヲ以テ本來土地ニ固着セル一般ノ義務ヲ解除スル
ノ方便トスルニ至リテハ素リ誤謬ノ見タルヲ免レス如何トナレハ近
世ニ於テ「レアラスタン」ヲ廢止セルハ私法上ニ於ケル義務解除ノ原理
ニ基クモノニアラスシテ只メ社會法上土地自由權ノ原則ニ基クヘキ
モノナレハナリ

蓋シ古代借地法ニ於ケル共同的ノ精神ハ直ニ公法ノ勢

力ニ吸收セラルヘキハ高尚ノ文化ニ遷遇スル近世ニ於テ免ルヘカラサルノ數ナリトス

第三百三十六節 從奴

地領主統括團結ニ屬スル耕作民ハ人身上ノ自由ヲ有スルモノト自由ナキモノトノ二種ニシテ其ノ自由ナキ者ヲ稱シテ從奴ト云

(按奴隸ハ禽獸若クハ物品ト等シク他人ノ所有シ得ヘキモノニシテ更ニ一個人タル資格ナシト雖從奴ニ在リテハ尙ホ一個人タル名義ヲ有シ只々他人ニ對シテ勞役ヲ爲スヘキ義務アルモノ、ミ故ニ大ニ奴隸ト異ナル所アリトス仍ホ下節ヲ一讀シテ其ノ差異ヲ見ルヘシ

(ルンデー氏所著獨逸私法論第四百八十三節モーレル氏所著借地法沿革史第一卷第四百七十七葉參照)

物品ト同視スヘキ全ク自由ナキ奴隸ト稱々自由ヲ存スル從奴トノ區

別ハ基督教ノ勢力ニ依リ夙ニ之レヲ弛メタルモノナレトモ古代ノ日耳曼法ハ羅馬法ニ於ケルカ如キ嚴格ノ區別ヲ立テタルモノニアラス(タシタス氏所著ゼルマニカ第二十五章ワルテル氏所著獨逸法沿革史第二卷第三百五十九節參照)

右人身上ノ差等ハ借地法上更ニ勢力ナカリシト雖其ノ從奴タルモノハ自己一身ハ勿論其ノ家族ヲ舉テ盡ク嚴格ナル法律ノ配下ニ從屬シ其ノ主人ニ對シテ人身ノ自由アル耕作民ノ有セサル庸役調租ノ義務ヲ負擔セリ

(ワルテル氏所著獨逸法沿革史第二卷第三百七十三節及ヒモーレル氏所著獨逸共同組合團結沿革史第百〇二節及ヒ本書前第百二十六節參照)

故ニ從奴ハ其ノ主人ノ土地ヲ占有スルト否トヲ問ハス庸役調租ノ義務ヲ有スルノミナレトモ主人ノ承諾アルニ

アラスンハ此ノ義務ヲ免ル、トヲ得ス且ツ此ノ義務及
ヒ主人ノ權利ハ常ニ子孫ニ世傳ス

故ニ主人ノ權利ハ從奴ノ身體財產ヲ所有スルト同視スヘキモノニア
ラスシテ從奴ハ猶ホ自由民ト同シク社會中ノ一個ハタルヘキナリル
ンデー氏所著獨逸私法論第五百三十九節參照)

從奴タルトハ本人ノ生産結婚明諾若クハ默諾又ハ處刑
若クハ主人ノ期滿得權ニ由リテ生シ明諾若クハ默許ノ
解放又ハ期滿免除若クハ法律上ノ認了ニ由リテ消滅ス

(ルンデー氏所著獨逸私法論第五百四十一節第五百四十二節第五百四
十三節及ヒ第五百五十四節參照)

從奴タル資格ヨリ生スル權利義務左ノ如シ

(第一)從奴ノ主人其ノ從奴タルノ認可若クハ其ノ結婚ノ
許可ヲ與フルトキハ主人ハ其ノ許可料ヲ徵收スルトヲ

得

(普國國法全典第百六十一節及ヒ第百六十二節參照)

故ニ從奴ト雖適法ナル婚姻ヲ結ビ得ルコトヲ見ルヘシ且ツ此ノ結婚ハ
主人之ヲ拒ムコトヲ得スルンデー氏所著獨逸私法論第五百四十四節ワ
ルテル氏所著獨逸法沿革史第二卷第三百七十節參照)

又己ニハドリアン第四世ノ時代ニ於テ教會ノ力ニ由リ主人ノ承諾ナ
キ從奴ノ結婚ト雖モ再ヒ之ヲ解クコトヲ得サルモノトシ斯カル結婚ハ
只々相續法上ニ關係ヲ及ホシタルニ過キサリキ

(第二)主人ノ許可ナクシテ他邦人トナリ又ハ他邦ノ籍ニ
入りタル從奴ハ主人之ヲ追跡シテ取戻スノ權ヲ有ス

(ルンデー氏所著獨逸私法論第五百四十五節ワルテル氏所著獨逸法沿
革史第二卷第三百七十五節參照)

(第三)從奴ハ主人ノ土地ニ固着スルノ義務ヲ有ス

(ルンター氏所著獨逸私法論第五百四十六節參照)

(第四)從奴ノ子ハ其ノ主人ノ許可ナクシテ之ヲ家僕又ハ職工トシテ他人ノ爲メニ服役スルト得ス蓋シ主人ハ其從奴ノ子ノ勞役ニ就キテハ先取ノ權ヲ有シタリ

從奴ノ子ニ對シテ主人ノ權利ヲ有スル所以ノ理由タルハ主人ノ之ヲ養育スルノ義務アルト一ハ自由ナキ從奴ノ子ハ其ノ父母ノ職業ニ由リテ保養セラレヘキモノナリシニ在リ(普國々法全典第百七十一節及ヒ第百八十五節ワルテル氏所著獨逸私法論第三百七十五節ルンター氏所著獨逸私法論第五百四十八節參照)

(第五)從奴ノ死亡シタル時ニ際シテハ主人其ノ遺産中ノ幾部ヲ受領スルノ權ヲ有ス之レヲ稱シテ「モルチユアリウム」ト云フ

(ルンター氏所著獨逸私法論第五百四十九節及ヒワルテル氏所著獨逸

法沿革史第二卷第三百七十七節參照)

終リニ臨ミ仍ホ看過スヘカラサルハ土地占有ノ交換ニ由リ自由耕作民及ヒ從奴ノ權利ハ相互ニ混交シ從奴ノ盡スヘキ義務若クハ少ナクトモ其ノ幾分ハ自由ナル耕作民モ亦之ヲ負擔セサルヘカラス就中人ノ從奴タルノ一事ハ毫モ耕作地ノ占有權ヲ相續スルノ妨トナルトナカリシノ一事ナリ

(ルンター氏所著獨逸私法論第五百三十八節參照)

又タ右從奴ノ盡スヘキ人身上ノ責任ハ金錢ヲ以テ之レニ代ヘ其ノ自由ヲ購フト得ルニ至リテヨリ時世漸ク移ルニ從ヒ本來自由耕作民ト從奴タリシ者ハ次第ニ合シテ遂ニ一種族ヲ爲スニ至ルハ當時ノ立法上ニ於テ昭々トシテ事跡ノ徵スヘキモノアルナリ

(千七百六十四年十二月三十日ノフレアリッキ大王ノ耕作條例普國々法
全典第二卷第七篇第一節乃至第十七節千七百八十一年十一月一日ノ
シヨ―セフ第二世ノ「パテント」千七百八十五年フッシユル氏所著財務及警
察法論第一卷第四百二十節ウエスフル氏所著獨逸私法論第一篇第三
十一章第三百三十三葉ハウスシルト氏所著借地法ルンデー氏所著獨
逸私法論第四百八十四節附論第二スタイン氏所著行政學第七篇第百
五十八葉參照)

第三百三十七節 地領主統括團結ト市邑團結ト
ノ關係

地領主統括團結モ亦「マルク」共同組合團結ト等シク後世
ニ及ンテハ市邑團結ニ變性セリ(本書前第三十節參照)然
レ凡耕作農業ヲ事トスル地領主團結ハ自由ナル「マルク」
共同組合ト異ニシテ多クハ地主ノ統括ニ屬スル市邑團

結ニ移リタリ

(リヨシチ―氏及ヒシモン氏所著普國市邑法緒論第四葉リヨンネ―氏
所著普國々法論第二卷第三百四十六節オルトロフ氏所著獨逸私法原
論第二百三十五葉ヒリップ氏所著獨逸私法論第二百五十二節及ヒ本
書前第一百十一節參照)

斯カル市邑内ニ於ケル市邑百般ノ事務ハ首長ノ指揮ニ
從ヒ邑民自ラ之レヲ處理スト雖此ノ首長ハ常ニ地領主
ニシテ邑會ノ議決ノ如キモ其ノ許可ヲ經ル―ヲ要ス但
シ此ノ許可ノ權ハ後世ニ至リテ地方廳ノ掌握スル所ト
ナレリ

首長ノ地位ハ土地ト共ニ相續スル―ヲ得タリ(普國々法全典第二卷第
七章第四十八節參照)
新ニ土地ヲ得有シタル者ニシテ首長ノ地位ヲ占メントスルニ裁判所

ニ於テ之ヲ審理スヘキモノトセリ(ヒリツプ氏所著獨逸私法第二百五十二節オルトロツフ氏所著獨逸私法原論第二百三十七葉參照)

然レ市右等ノ市邑制度ハ土地束縛ノ廢止及ヒ近世ノ新市邑法ノ設置ニ由リテ全ク廢滅セリ(本書前第一百十一節及ヒ第一百十二節參照)

第三款 管地者統括

第一百三十八節 管地者統括ノ性質

管地者統括ハ普通法ノ保護ヲ受クルト能サル人民及ヒ借地占有ノ權ナクシテ地主統括ニ屬セサル人民ヲ保護スル統括團集ナリ而シテ此等ノ人民ハ主人ヨリ解放セラレテ自由人トナリタル奴隸若クハ土地ノ占有ナクシテ地主統括内ニ住スル外國人及雇工又ハ自己ノ土地ヲ所有スル自由人ニシテ自ラ其身ノ保護ヲ領主ニ托スル

者等ヨリ成レリ

(ワルテル氏所著獨逸法沿革第二卷第四百〇九節及第四百二十節乃至第四百二十三節モーレル氏所著借地法沿革史第一卷第三十八葉ツエーブル氏所著獨逸法沿革史第三百二十六葉及ヒ第三百八十四葉普國々法全典第百十三節乃至第百二十一節參照)

自己ノ所有地ヲ有スル者ニシテ自ラ管地者統括ニ屬シタルトアリシノミナラスマルク土地共同組合ハ其ノ一團ヲ舉ツテ一管主ノ配下ニ屬シ此ノ管主ハ次第ニマルク組合ノ權カヲ吸收セルトナキニアラス(モーレル氏所著マルク組合沿革史第百九十六葉第四百三十八葉參照)

中世ノ不動産法ニ常ニ固有ナル人身上ノ隸屬ハ管地者統括ニ於テモ亦行ハレ其ノ管内ノ人民ハ管地者ニ對シテ服從ノ義務ヲ負ヒ且ツ租稠庸役ヲ奉セサルヘカラサリシモノトス

(ワルデル氏所著獨逸法沿革史第二卷第四百〇九節及ヒ第四百二十二節參照)

管地者統括ニ屬スル人民ハ其ノ土地占有權ノ讓與得有上ニ多少ノ制限ヲ受ケタルハ獨逸不動産法ノ原理ヨリ發生スヘキ結策タルハ勿論ナリ就中相續稅ヲ徵集シ及ヒ相續者ナキハ其ノ遺産ヲ沒收スルノ權ハ常ニ管地者ニ屬シタリ

管地者ハ又其ノ管内人民ニ對シテ強暴ヲ制シ不法ヲ正シ以テ之ヲ保護スルノ責任ヲ有シタリ而シテ斯カル管地者ト其ノ人民トノ關係ハ次第々々ニ正式ナル司法制度地方行政權ニ變化シ其ノ人民モ亦他ノ民族ニ混同シテ遂ニ一般人民ト差異ナキニ至レリ

第四款 封建祿地制

第三百三十九節 封建祿地制ノ本性

祿地ハ概テ不動産ニシテ領主及ヒ臣下二人ノ間ニ於ケル土地占有ノ關係ヨリ臣下ハ其ノ領主ニ對シテ人身上誠實ヲ盡スヘキ責任ヲ有スルモノトス

(アイヒホルン氏所著獨逸私法總論第九十二節ワルデル氏所著獨逸法沿革史第一卷第九十八節第二卷第五百六十節ゲルベル氏所著獨逸私法論第百〇三節及ヒ第百〇四節ベゼーレル氏所著獨逸私法論第二卷第九十九節及ヒ第百〇四節參照)

祿地ハ領主ヨリ式ヲ以テ其ノ臣下ニ貸與シ臣下ハ必然其ノ土地ノ占有權ヲ有シタリ

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第百十四節ベゼーレル氏所著獨逸私法論第二卷第百〇五節參照)

然レモ領主ハ尙ホ其ノ臣下ニ讓與シタル土地ニ就キテハ所有權ヲ保有シ臣下ノ外他ノ人々ニ對シテ純然タル

一個ノ所有主タル諸種ノ權利ヲ有シタルノミナラス其ノ貸與シタル祿地ハ適當ノ方法ニ由リ其ノ荒敗ヲ防止シ且ツ臣下ニシテ其ノ祿地ヲ他人ニ讓與スルニハ常ニ領主ノ承諾ヲ要スヘキモノトセリ

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第百二十六節第百二十七節第百三十二節 第二百六十七節及ヒ第二百六十八節參照)

臣下ハ其ノ祿地ニ就キテハ甚々廣大ナル收穫及ヒ處分ノ權利ヲ有シ實際殆ント其ノ所有地ト異ナルナカリシト雖只々領主ノ所有權及ヒ相續者ノ有スヘキ固有ナラサル權利ニ就キテ多少ノ制限ニ服シタルノミ
臣下ハ又々前述ノ權利ヲ有スルト同時ニ領主ニ對シテ諸種ノ義務ヲ負擔セリ即チ領主若クハ臣下ノ死亡ニ際シテ新ニ祿地ヲ借受スルノ義務土地ニ屬スル諸般ノ義

務及ヒ適當ニ祿地ヲ保全スル義務等ナリ

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第百二十五節參照)

土地ニ關スル義務ノ外臣下ハ又々人身上其ノ領主ニ對スル義務ヲ有セリ即チ其ノ領主ヲ尊敬シ其ノ命令ヲ遵守シ且ツ凡ソ身体財産及ヒ名譽ヲ損傷スヘキ行爲ヲ避ケ領主ノ役ニ服スルヤ常ニ誠實ヲ旨トセサルヘカラス且ツ特別ノ契約ニ由リ往々金錢若クハ物品ヲ納メ或ハ武藝ヲ演シ又ハ公務ニ従事セサルヘカラサルモノトセリ

(ベセーレル氏所著獨逸私法論第二卷第百十節參照)

右ノ外臣下ハ仍ホ領主ノ司法權ニ服從シ其ノ裁判ニ對シテ不服ヲ稱フルコトヲ得ス

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第百二十節第百二十一節ベセーレル氏所

著獨逸私法論第二卷第一百十節參照

之ニ反シテ領主カ人身上其ノ臣下ニ對スル責任ハ其ノ臣下ヲ保護シ犯罪ヲ防止スルニ止マリシノミ

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第二百二十四節ベゼーレル氏所著獨逸私法論第二卷第一百十一節參照)

右領主ト臣下ノ間ニ存スル義務誠實ヲ破ルモノハ重罪ニシテ犯者ハ直ニ祿地ノ權利ヲ剝奪セラルヘシ

第四百十節 同上

祿地ハ土地占有ノ關係ヨリシテ特別ナル人身上ノ隸屬及ヒ服務ノ制度ヲ創設スルノ階梯タリ

故ニ臣下ニシテ祿地ヲ有シ得ヘキ資格ハ專ラ服役ニ從事シ得ヘキ能力ノ有無如何ヲ以テ之ヲ定メタルヲ以テ設令ヘハ婦女ノ如キハ斯カル能力ナキモノナルカ故ニ從ツテ祿地ヲ受クルノ權ナカリシナリ(ベ

ゼーレル氏所著獨逸私法論第二卷第一百〇二節ゲルベル氏所著獨逸私

法論第一百十節參照)

一般ニ婦女僧侶無形人猶太人犯罪者及ヒ破廉耻者等ハ祿地ヲ受クルノ資格ナシ

封建祿地ノ制度並ニ上來已ニ論セル土地制度ハ實ニ中世一般ナル法理ノ如何ヲ證スルニ足ルヘキナリ即チ中世ニ於テハ他人ノ權力ニ服從隸屬スル一ハ事物其物自身ノ内部ニ於ケル目的ヨリ發生シタルモノニアラストス言ヲ換テ之レヲ言ハ、目的アリテ始メテ其ノ制度ソ發生ヲ致シタルモノニアラス只タ外部ノ土地占有ノ方法ニ基キタル自立ノ制度ニ過キスト是レ日耳曼人種ノ固有セル自由ノ精神中ヨリ發生セル法理ノ思想ニシテ國家ノ成立漸ク萌スニ及ンテヤ公ケノ活動發達ト分

離スヘカラサル土地占有上ノ制度ナリ

何レノ國ヲ問ハス國家アレハ必ス邦土アルヘキモノニシテ人民ノ活動發達ハ大ニ其ノ土地ノ生産ニ關係アルヘキハ當然ナリ故ニ公權利ノ發生ヲ以テ邦土ニ基クモノトスルハ自然ノ論局ナリ日耳曼法律ノ發達構成ノ所以モ亦此理ニ外ナラス

國家ノ何物タルノ法理想ニシテ其ノ自由ノ發達ヲ爲シ其ノ理明カナルニ至テハ國家ハ土地ト分離シテ獨立ノ成立ヲ爲シ又タ將來必ス土地ト分離セサルヘカラサルモノナレハ空中ニ國家ヲ創設スルハ素リ爲シ得ヘキヲニアラス故ニ國家ハ一層廣大ナル社會中ニ於テ普通一般ナル土地上ニ其境土ヲ有セサルヘカラス是レ土地占有ニ關スル事項ハ社會法ニ屬スルモ今日ニ於テハ尙ホ國法ノ原理ニ依リテ論究セサルヘカラサル所以ナリ但シ其ノ之ヲ以テ私法中ニ論述スルカ如キハ素リ當ヲ得タルモノニアラサルヤ論ヲ待タス(ベゼーレル氏所著

獨逸私法論第二卷第九十九節ゲルベル氏所著獨逸私法論第百〇三節

參照

社會法ハ公法ノ原理ニ基キ人身上ノ隸屬ヲ認了セザルカ故ニ封建祿地制度ノ原理ヲ認メサルヤ勿論ナリ但シ領主ニ奉スヘキ公租ノ制度ハ已ニ古來ヨリ存在シ特リ封建時代ニ始マリタルモノニアラストス

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第百〇三節參照)

封建制度ハ不充分ナル國家ノ成形ニシテ已ニ羅馬ニ於テモ其ノ邦國ノ成立ハ古來ノ「トリヒユス」リユーリエ」及ヒ「シヤント」等ノ諸種族ニ基キ而シテ此等ノ種族ハ常ニ境地ニ固着セルモノナリシ故ニ今日ニ於ケルカ如ク單ニ理論ニ由リテ國家ノ成立ニ必要ナル原質ノミヲ認メ國家ハ只タ普通一般人民ノ義務トシテ各人各個カ人身上ニ於ケル結合ニ過ヤストスルハ實ニ高等ノ文化發達ノ時期ニ於テノミ始メテ

之ヲ見ルヘシト雖國家ノ成立ニ由リテ始メテ其ノ活動ヲ爲シ得ヘキ
、民人ノ一團結ハ斯クシテ果シテ國家ニ必要ナル万般ノ制度ヲ具備シ
得ヘキカ將タ單純ナル理論ハ其ノ實全ク架空ノ虛誕ニ過キサルヘキ
カ恐クハ尙ホ精密ノ研究ヲ要スヘキ一問題ナランノミ

故ニ封建制度ハ公ケノ性質ト祿地占有權トノ二元素ヲ
混合シタルモノニシテ其ノ土地ニ屬スル元素ハ只タ虛
空ノ儀式ニ止マリ實際甚タ其効ナカリシモノナリトス

(オルトロップ氏所著獨逸法原論第三百五十一葉ヒリツプ氏所著獨逸私
法論第二卷第九十三節參照)

然レ臣祿地ノ制度ハ全ク私法ニ屬シテ封建邦國ノ成立
ニ關係ナキ外物ナリト見做ストヲ得ス如何トナレハ領
主ト臣下ノ間ニ於ケル人身上ノ關係尙ホ存スル限リハ
臣下ノ私ニ占有スル土地タル常ニ數多ノ制限ヲ受ケタ

レハナリ但シ此等ノ制限タル近世ニ於ケル不動産所有
ノ自由ト必然相牴觸スルハ勿論ナリ

故ニ祿地ノ制度ハ理論上封建邦國ノ原理ニ必要ナリシヲ以テ素リ今
日ノ社會ニ於テハ認了スヘカラサルモノナルモ當時ノ制度ヲ論スル
ニ就テハ之ヲ私法ニ屬スル事項トスルコトヲ得ス(ベゼーレル氏所著獨
逸私論第二卷第九十九節及ヒ第百〇二節參照)

封建制度ノ廢止ハ祿地ニ附スルニ私權利ノ性質ヲ以テ
シタルモノニアラスシテ私人ノ土地占有ノ權ヲ以テ社
會法ノ範圍ニ編入セシモノナリ故ニ祿地ノ制度ハ私法
中ニ屬セサルヲ以テ私人相互ノ間ニ於テ隨意ニ之レヲ
創設スルコト能ハサルモノトナレリ

獨逸私法論ノ各著者カ唱道セル祿地制度ノ理論ハ古今ノ時世ヲ誤リ
タル謬見ニシテ若シ祿地ノ制度ヲシテ今日ニ存セシメハ此ノ制度ハ

當サニ政務行政學中ニ論述スヘキ事タリ

第四百十一節 祿地類似制度

適當ナル祿地ノ外仍ホ之レニ類似セル土地占有ノ制度
興レリ抑モ此ノ類似祿地ノ物上權及ヒ相續權ニ關シテ
ハ純粹ナル祿地下異ナル所ナカリシト雖臣下タルノ誠
實ヲ盡シ及ヒ武事ニ從事スルノ責任ナク又タ犯罪ニ由
リテ祿地ヲ奪ハル、カ如キ制度ナカリシモノナリトス
(ルンデー氏所著獨逸私法論第五百二十五節アイヒホルン氏所著獨逸
私法階梯第九十二節ヒリツプス氏所著獨逸私法第二卷第九十三
節ブルベル氏所著獨逸私法論第百〇四節及ヒ第百三十九節參照)
故ニ右類似ノ祿地ハ耕作地ノ占有及ヒ之レヨリ生スル
庸租調役ニ基キタル古代不動産法ノ一種ニシテ其祿地
契約ニ由テ生シタル權利義務モ亦此ノ不動産法ニ適當

ナル者タルニ外ナラサリシナリ

(ゲルベル氏所著獨逸私法論第百三十九節參照)

第五款 教會ノ權力

第四百十二節 教會權擴張ノ第一原因

中世ニ於ル教會モ亦公ケノ原質ヲ含ミタル事項中ニ列
スヘキモノ、一ニシテ其勢力ハ特種ナル土地占有ノ制
度ヲ創設スルニ至レリ而シテ教會カ此ノ土地占有ノ制
度ヲ創設シタル方法ニ二様アリ今先ツ其ノ第一ノ方法
ヨリ論セム
第一ニ教會寺院ハ君主ノ惠與私人ノ寄附及ヒ荒地ノ開
拓等ニ由リ甚々廣大ナル土地ヲ得有シ之レヲ借地若ク
ハ祿地下シテ利用シタリシ故ニ其ノ土地ニ關シテハ教
會ハ恰モ國君ト同様ナル權利ヲ有シタリ然レモ事物ノ

本性ニ於テ教會財産ニ關スル行政及ヒ司法ハ曾テ宗教上ノ責任ニ基キタルモノナルヲ以テ特ニ之ニ關スル成規ヲ制定シ且ツ其ノ土地讓與ノ成規ハ通常一般ノ成規ト自ラ異ナル所ナキヲ得ス

(ワルテル氏所著獨逸私法論第一卷第六十六節第百〇三節アイヒエルン氏所著獨逸國及獨逸法律沿革史第一卷第百八十八節參照)

故ニ教會ノ土地ヲ管理スヘキ一種ノ官制及ヒ特種ナル土地占有ノ方法(Precarion, Beneficium)ヲ發生シ通常ノ土地占有ノ方法ニ其ノ影響ヲ及ホシタリ

(ロート氏所著教會借地法沿革史ワルテル氏所著獨逸法沿革史第二卷第七十五節第七十六節第八十五節及ヒ第八十六節參照)

又々教會ハ基督教旨ニ基キタルカ將々其ノ遠識ニ依リタルカ其ノ土地占有者ヲ責ムルニ通常ノ土地占有者ニ

比スレハ甚々寛大ナル義務制限ヲ以テセリ

教會ノ土地不動産ハ永ク其ノ本性ヲ保持スル丁能ハス其ノ土地ノ賣買讓與等ニ由リ次第ニ一般普通ノ不動産法ニ歸スルニ至レリ尤モ今日ニ於テハ教會ノ新ニ土地ヲ得有スル丁ヲ禁止シ又ハ之ヲ制限シ且ツ市邑ニ於ケル教會財産ノ行政ハ官衙ト共同ノ作用ヲ要スヘキモノトナレリ

(本書前第九十七節參照)

第四百四十三節 同上第二ノ原因

教會カ土地ニ關シテ其ノ勢力ヲ發達セル第二ノ方法ハ十分税ノ制度トス抑モ十分税ハ土地收穫ノ一分ヲ上納スルノ義務ニシテ教會ニ限ラス他ノ地領主ト雖之ヲ徵スルノ權ナキニアラサリシト雖本來教會ノ創設スル所

ニシテ教會ノ之ヲ徵スルノ權ハ國家ノ認了シタル所ノ者ナリトス

(ヒリップス氏所著獨逸私法論第二卷第二百六十二節ゲルヘル氏所著獨逸私法論第九十節附論第一ケンケレル氏所著獨逸私法論第一卷第三百十六葉アイヒホルン氏所著獨逸國及ヒ獨逸法律沿革史第一卷第百八十六節ワルテル氏所著獨逸私法論第五百三十一節シユルター氏所著教會法論第百八十五節參照)

十分税ノ法ハ本來嚴格ナル道德上ノ義務ニシテ教會評議會ノ議決ニ由リテ規定セラレ其ノ之ヲ破ルモノハ罰金ノ制裁アリシノミナラス尙ホ其ノ宗旨ヲ破門セラレタリ

故ニ十分税ハ只々教會ノ必需ニ供スル一般教會税ノ一ニ過キス且ツ其ノ支出ノ方法ハ一定ノ成規ニ由ルヘキモノニシテ常ニ公ケノ性質ヲ有シタルモノナリ

(アイヒホルン氏所著獨逸國及ヒ獨逸法沿革史第一卷第百八十六節附論第十三ルンデー氏所著獨逸私法論第五百〇九節ヒリップス氏所著獨逸私法論第二百六十二節ゲルヘル氏所著獨逸私法論第百九十八節參照)

斯ク十分税ハ只々教會ノ有スル收稅權ニ過キサレ且中世ニ於ケル法理ハ之ヲ以テ一種特別ノモノトナシ其ノ權利ハ教會カ眞神ノ代表者トシテ地球上ニ有スヘキ最高權トセリ

(フヒツシエル氏所著財務及警察法論第一卷第千二百四十四節ブルンチユリー氏所著獨逸私法論第一卷第百八十九節ケンケレル氏所著獨逸私法論第一卷第三百十七葉參照)

然レ教會ハ必スシモ右特種ノ權利ヲ擴張シテ余地ナキニ至ラシメサリシヲ以テ時勢ノ變遷ニ從ヒ他人ノ押領

又ハ教會ノ讓與ニ由リ十分稅地ハ次第ニ教會外ナル他人ノ手中ニ落チ十分稅ハ僅ニ一般普通ノ「レアラステン」ノ性質ニ化スルニ至レリ且ツ此ノ十分稅ト雖教會ハ漸々其ノ特種ナル最高ノ性質ヲ去リ只ダ單純ナル地租タルニ過キササルニ歸シタリ

(アイヒホルン氏所著獨逸國及ヒ獨逸法律沿革史第一卷第百八十六節

參照)

獨逸諸邦ノ多數及ヒウアンデン地方ニ於テハ全ク十分稅ヲ廢シ又ハ之ニ代ユルニ金錢ヲ以テセルモノ多シ

(ワルテル氏所著獨逸法第五百三十一節參照)

故ニ教會ハ十分稅ノ權利者トシテハ他ノ權利者ト同等ナル權利ヲ有スルニ過キスシテ其ノ權利ノ有無ニ關スル爭議訴訟ニ於テモ教會ハ其ノ權利ノ本源ヲ證明シ又

ハ永遠記臆スヘカラサル古代ヨリ成立スル所以ヲ證明セサルヘカラス

(ルンデー氏所著獨逸私法論第五百〇九節ゲルヘル氏所著獨逸私法論

第九十節附論第二、ヒリップス氏著獨逸私法論第二百六十二節シユル

デー氏所著教會法論第百八十五節參照)

猥リニ十分稅ノ義務ヲ負フタル土地ノ形狀ヲ變シ又ハ其ノ耕作ヲ怠リ定規ノ稅額ヲ減少スルヲアラハ權利者ハ之レニ對シテ不服ヲ訴フルトテ得レド義務者モ亦必スシモ其ノ土地ノ進歩ヲ謀リ以テ稅額ヲ増加スルノ責任ナキモノナリトス

(アイヒホルン氏所著獨逸私法階梯第二百五十四節ゲルヘル氏所著獨逸

私法論第百九十節附論第十四參照)

十分稅法ヨリ發生スル諸種ノ權利義務ハ決シテ之レヲ

私法上ヨリ論述スルトアルヘカラス如何トナレハ十分
 税ナル者ハ教會カ人類ノ發達進化上有カノ一元質タル
 資格ヲ以テ公ケノ權力ニ由リ土地不動産上ニ賦課シタ
 ル租税ナリ然レモ斯カル權力ハ他ノ土地ニ關スル統括
 權及ヒ封建祿地ニ關スル權力ト等シク共ニ今日ノ社會
 法理ニ反スヘキモノタルヤ勿論ナリ故ニ十分税ノ制度
 モ亦封建制度ト共ニ之レヲ古代不動産法ノ中ニ列シ土
 地不動産ノ自由ニ基キタル社會法ノ創成ト共ニ之ヲ廢
 減セサルヘカラサルモノナリトス

第六款 國土權

第一百四十四節 君主國土權

國土權ハ其ノ始メ君主ノ有スル司法權ニ合スルニ地主
 權ヲ以テシタルヨリ發生セリ抑モ諸侯國ノ權利ト雖モ

其ノ始メヤ諸侯カ公ケノ官吏タル資格ニ由リ帝主ヨリ
 受領シタルモノニシテ本來地上ニ屬セス諸侯ノ一身ノ
 ミニ屬スル權利ナリシモ人身上ノ關係ト土地上下ノ關
 係ヲ密接セル日耳曼法律ノ固有ナル勢力ニ由リテ地上
 ノ權利ト人身ノ權利トヲ結合スルニ至レルナリ此ノ理
 ト同シク國土權モ亦君主カ古代ヨリ襲ヒ來レル司法上
 ノ特權ニ合スルニ地主タルノ權利ヲ以テセルモノナリ
 (ワルテル氏所著獨逸法沿革史第百八十八節第二百八
 十二節第三百十節第三百六十二節及ヒ第三百七十四節ラントウ氏所
 著國土沿革史第二百九十九葉レウ氏所著獨逸國及ヒ國土沿革史ツエ
 ーブル氏所著獨逸法沿革史第五十三節參照)
 故ニ國土ハ帝國ノ一境域ヲ指スモノニシテ其ノ境内ニ
 ハ宗教上又ハ宗教外ノ地主統括權ヲ世襲セル帝王ノ司

法權(中央權地方權ヲ問ハス)ノ行ハル、モノナリ而シテ
右國土ノ境域ハ一侯國內ニ止マルト數侯國ニ勝ルトニ
從ヒ其ノ大小ヲ異ニセリ

(ツエーブル氏所著獨逸法沿革史第四百九十葉參照)

國土權即チ君主カ其ノ國土ノ上ニ有スル權力ハ諸種ノ
權利ヨリ構成セルモノニシテ各々其ノ基源ヲ異ニシ其
ノ得有ノ方法ヲ同フセス而シテ此等ノ權力ハ聯邦ノ各
國內ニ於テ諸種ノ方法ニ由リ之ヲ使用シ各其ノ度ヲ異
ニセシト雖警察權次第ニ其ノ發達ヲ成スニ及ヒテヨリ
各邦主權ノ思想ニ統一セラレウエストハリヤノ平和條
款ニ依リ帝國ノ制限ヲ受クヘキ國權ト爲シ千八百〇六
年獨逸帝國ノ瓦解ニ及ンテ尙ホ之レヲ保存セリ

(ワルテル氏所著法律沿革史第二百八十一節千八百十五年六月八日獨

逸聯邦條例第一條參照

然レ凡獨逸聯邦諸國ハ各自獨立ナル國權ヲ有シ得ヘキ
モノニアラス千八百十五年獨逸諸邦ノ聯合及ヒ千八百
七十一年獨逸帝國ノ再興ノ原理ニ由リ各聯邦諸國ハ一
層高尚ナル一大帝國中ノ一邦タルニ過キサレハ宜シク
連合統一以テ邦家ノ發達ヲ期スヘキモノタリ

第四百十五節 王室地

耕作地占有者ノ國土權ニ對スル關係ニ二様アリ第一耕
作地占有者ハ君主ノ自ラ直接ニ占領スル數多ナル土地
ヲ保有スルモノニシテカ、ル君主ノ占領地ヲ領地トミク及ヒ
王室財產ト云ヒ其ノ耕作者ヲ稱シテ領地若クハ王室地
ノ耕作者ト云ヒ以テ之レヲ地主統括者ノ耕作者又ハ相
續占有地ノ耕作人ト區別セリ

(ルンデー氏所著獨逸私法論第四百八十七節及ヒ第四百八十八節ア
ヒホルン氏所著獨逸私法階梯第二百四十五節フツシエル氏所著王室
地及ヒ警察法論第一卷第千百八十二節參照)

故ニ國土權ノ下ニ在ル耕作民ハ其ノ耕作地ニ對スル法
律上ノ所有權ヲ有セサリシモノナリト雖國土權ノ及フ
所ハ其ノ範圍頗ル廣大ナリシヲ以テ其ノ耕作民モ亦通
常一般ナル地主統括ノ耕作者トハ自ラ異ナリタル地位
ヲ占メサルヘカラス故ニ土地ニ關スル制限次第ニ弛ミ
地主ニ隸屬スルノ責任モ亦消滅スルニ從ヒ領地耕作民
ハ次第ニ一定ニシテ且ツ永續スヘキ權利ヲ得有スルニ
至レリ

(本會前第二十八節ユーグイヒ氏所著獨逸土地制限解除論第三十五葉
及ヒ第七十九葉參照)

然レモ又々一方ニ於テハ中世ノ不動產法ニ固有ナル法
理ニ由リ土地ニ關スル責任ヲ廢止スルナク國土權ノ
配下ニ屬スル耕作民ハ畜タニ人身上其ノ君主ニ對シテ
誠實ヲ盡スノ責任アルノミナラス又君主ニ對シテ一般
ニ服役及納稅ノ義務ヲ負擔セリ而テ此等ノ義務タル主
トシテ耕作民ニ賦課セルモノナレモ地主僧侶及ヒ市邑
カ其ノ君主ニ對スル責任義務ハ特ニ之ヲ定メタリ今マ
右ノ義務責任ヲ區分スレハ即チ左ノ數項ニ歸ス

(第一)兵役(兵事ノ爲メ其ノ通路ヲ整頓スルノ役其ノ他國
家ノ平寧ヲ保護スルノ諸役)

(第二)皇居ノ保存ニ關スル諸役

(第三)行政及ヒ司法事務ノ補助

(第四)道路修築ニ關スル諸役

(シリング氏所著サクセン不動産法第二百三十七節デネケー氏所著村邑法第一卷第七章参照)

其ノ他耕作民ハ漸々加重ノ負擔ヲ受ケタリ

(シリング氏所著サクセン不動産法第九十節参照)

然レ臣耕作民ノ常ニ富有ニシテ收税ノ義務ヲ盡スニ足ルヘキトハ君主ノ利益トスル所ナレハ君主ハ其ノ權力ヲ以テ地主ト耕作民トノ間ニ於ケル最高ノ法官タル資格ニ由リ地主ノ耕作民ニ對スル壓制ノ加重ヲ抑制シテ耕作民ヲ保護シ地主ノ權力ヲシテ常ニ耕作農業ノ發達進歩ヲ害スルトナカラシメントヲ務メタリ

君主カ斯カル權力ヲ有シタル所以ノ理ハ凡テ君主カ其ノ國土ニ對スル最高物上權ニ歸シタルモノニシテ中世ノ法理ハ公權ノ使用ヲ以テ土地ノ占領權ニ混同シ一國ノ主權ハ盡ク其ノ土地ニ對スル權力ニ基

キタルモノトセルヲ證スルニ足レリ(スタイン氏所著行政學第七卷第百六十四葉フヒツシエル氏所著王室財產及ヒ警察權論第二卷第四百五十一節参照)然レモ今日ノ法理ハ大ニ之レト異ニシテペーツル氏ノ如キハ君主ノ國土ニ於ケル權力ハ尠未モ之レヲ認了スルヲナシ(同氏所著バイエルン憲法第二十二節参照)

地主ノ耕作民ヲ束縛壓制セルヲ日ニ其ノ甚シキヲ加ヘ第十四世紀第十五世紀以來ハ地主ト耕作民トノ間紛争常ニ絶ヘスシテ往々耕作民ノ暴舉ニ及ヒタルヲアリ殊ニ南部獨逸諸邦ニ於テハ千五百二十四年及ヒ千五百二十五年ニ於テハ著シキ暴動ヲ發生シ其ノ耕作民ノ主張セル所ハ即チ左ノ數項ニ在リタリ

一、聖經及ヒ基督教旨ニ基キタル自由ヲ消滅スヘキ人身上ノ隸屬及ヒ相續稅ヲ廢止スル事

二、小ナル十分稅ヲ廢止シ大ナル十分稅ハ專ラ宗教上及ヒ地方邑貧民

救助ノ目的ニ費用スル事

三、猥リニ賦課シタル庸役ヲ廢止シ及ヒ耕作民ノ勞働ヲシテ無益タラシメサル様適當ノ標準ニ從ヒ過重ノ租稅ヲ減額スル事

四、獸獵及ヒ採伐權ヲ再許シ並ニ地主カ不法ニ押領シタル原野、牧場、及ヒ森林ヲ市邑ニ返還セシムル事

五、教會ノ僧侶ヲ撰擧シ及ヒ自ラ市邑ノ事務ヲ照顧スル市邑自由權ヲ再認スル事

六、公平ノ裁判ヲ保維スル事

(モーレル氏所著獨逸借地法沿革史第四卷第五百二十二葉參照)

地主ノ壓制專横ヲ抑制シ耕作民ヲ保護セルノ方法タル
其ノ始メハ先ツ耕作民ヲシテ現ニ事實上其ノ權カヲ得
セシメ而シテ之レヨリシテ貴族、寺院、市府等凡テノ地主
ト耕作民トノ間ニ生スヘキ訴訟ハ君主殊更ニ之ヲ不問

ニ附シタルニ在リシト雖後世ニ至リテ一國ノ主權其ノ
基礎ヲ固フシ自然法ノ原理ニ發生セル萬民幸福說ノ主
義次第一擴張スルニ從ヒ地主ト耕作民トノ關係ヲ整理
スルノ權ハ高等警察事務ノ一部ニ歸シタリ

(本書前第二十節ヨリ第二十一節迄參照)

右警察權ハ專ラ收稅上ノ事務ヲ執行セリ是レ耕作民ノ
資力ニ適スル以上ハ其ノ庸役租稅ハ君主ト地主ト之ヲ
配分スヘキモノトスルノ原理ニ基キタルモノナルヲ以
テ中世ニ於ケル君主及ヒ地主ト耕作民トノ關係ハ私法
上ノ原理ニ適セス寧口之ヲ公ケノ負擔ニ類スル一種ノ
モノト見做シ公ケノ利益得失ニ從ツテ之レカ成規ヲ設
ケタルモノナリトスヘシ

茲ニ殊ニ注意スヘキ一事アリ即チ此ノ君主ノ警察權ハ專ラ下等人民

ノ租税上納ニ對スル事務ヲ執行シ君主ハ常ニ警察權ト其ノ利害得失ヲ同フセルモノナリ故ニ警察治國ハ著大ナル專斷壓制ノ性質ヲ有シ其ノ所謂臣民ナル語ハ其ノ最モ狹義ニ於ケル意ニシテ單ニ下等ノ人民ヲ指シタルモノナリトス(ロツシエル氏所著獨逸法第一卷第十九節參照)

斯クノ如クニシテ君主ハ地主ノ專横ニ由リテ國家ノ役ニ服スヘキ耕作民ヲ衰弱セシムルトナキヤ否ヲ照顧シ來リタルニ近世ニ至リ人類相憐ノ情思次第ニ發スルニ從ヒ次第ニ寛和ノ制度ヲ生シ今日ハ作地條例ノ制定ト共ニ全ク舊弊ヲ除却シ遂ニ土地所有ノ自由ヲ得ルニ及ヘリ

第四百十六節 國土上ノ警察權

高等警察權ハ中世ノ法理ニ於テハ間接ナカラモ之レヲ

土地ニ關スル統括權ト云ハサルヘカラス而シテ此ノ警察權ハ耕作地上ニ施スニ左ノ成規ヲ以テセリ

(ロール氏所著家政全書クリンケネル氏所著邑法及耕作法デネケー氏所著村邑法フツシエル氏所著王室財産及ヒ警察權論第二卷第四百七十四葉ハーゲマン氏所著耕作法提要シリリンク氏所著サクセン耕地法提要參照)

(第一)耕作地ノ毀損ヲ全ク禁止スル事

(デネケー氏所著同上第一卷第六章第二卷第六章及ヒ第九章ハーゲマン氏所著耕作法第八十八節及ヒ第六十節千七百三十九年九月十七日ノバエールン達千八百五十二年五月二十八日ノ同上法律千八百六十年十一月十日ノ法律ヲ以テ之ヲ廢止ス)ペーツル氏所著バエールン行政法第三百七十一葉附論第五參照)

(第二)耕作民ハ耕地ト牧野トヲ問ハス官ノ許可ナクシテ

之ヲ賣買讓與若クハ質入シ又ハ寡婦ノ得有シ得ヘキ財產ト爲ス^トヲ得ス

(千五百九十五年四月三日ノブラウンシュワイグノ勅令ヲネケ^ル氏所著村邑法第一卷第六章第二卷第九章フツシエル氏所著王室財產及ヒ警察法論第一卷第千二百三十節參照)

(第三)凡テ耕作地ニ關スル嫁資讓與證書賣與證書配分證書及ヒ其ノ他ノ契約證書ハ法庭ニ於テ之ヲ取扱ヒ且ツ右等ノ契約ヲ爲サントスルニハ豫メ契約者雙方ヨリ之ヲ法庭ニ届出テ相當ノ手数料ヲ納メテ之レヲ法庭ノ簿帳ニ記入シ後日ノ公證ニ供スヘキモノトス而シテ當該官吏ハ右等ノ契約ハ君主ニ屬スル權利ヲ害スル^トナキヤ否又タ其ノ契約ハ法律正理ニ合スルヤ否ヲ檢定シ此ノ成規ニ違ヒタル契約ハ凡テ無効ニ歸セシムヘキモノ

ナリトセリ

(アチケ^ー氏所著村邑法第一卷第六章第三十三節シリング氏所著サクセン耕地法第二百十六節參照)

(第四)耕作民ハ高利ノ貸借契約ヲ爲ス^トヲ得ス且ツ耕作民ノ必要トスル耕作具ノ價格ト米穀ノ價格トハ常ニ一致併行スヘキモノトス

(モ^ーセル氏所著警察事務上ノ最高權論第七章第九節フツシエル氏所著王室財產及ヒ警察權論第二卷第千〇十節普國々法全典第二篇第七章第百三十一節メクレンブルヒノ農産及ヒ日用品稅ニ關スル千七百五十五年ノ法律第二百六十三節參照)

未タ收穫トナラサル米穀ノ賣買ノ禁止モ亦此ノ種ニ屬ス

(第五)說教師ハ耕作民ヲシテ法庭ニ於テ結婚贈與ヲ確認シ若クハ地方廳ニ於テ結婚ヲ明許シタル確證アルニア

ラサレハ其ノ結婚ノ儀式ヲ公行シ又ハ結婚ヲ爲サシム
ルトヲ得サルモノトス

(ゲゼニウス氏所著耕地法第一卷第四百九十四葉及ヒ第五百〇四節參
照)

(第六)怠惰遊逸等ニ由リ耕作地ヲ損害シ租税其ノ他ノ義
務ヲ盡スト能ハサルニ至ラシメタル耕作民ハ君主ノ權
利ヲ害シ國土ヲ損スルモノトシテ地方廳ハ地主ノ協力
ヲ以テ其ノ占領ノ土地ヲ剝奪ス又タ之レニ代ハルヘキ
適當ノ代理耕作人ナキ片ハ數多ノ農家ニ其ノ土地ヲ分
割シテ之ヲ耕作セシムルトヲ得ヘシ

耕作民ノ占領セル土地ヲ剝奪スルハ一般ニ君主ノ許可ヲ要スヘキモ
ノトス(ゲゼニウス氏所著耕地法第一卷第四百四十一葉及ヒ第四百九
十四葉テネケ―氏所著村邑法第二卷第九章第十二節普國々法全典第

二卷第七章第二百八十八節乃至第二百九十七節千七百六十三年一月
二十一日及ヒ千七百七十二年八月三日ノバエールン達參照)

千七百六十二年三月二十四日ノバエールン達令ニ據レハ充分牧畜ノ
行ハレサル土地ハ官ノ權カヲ以テ之レヲ分割シ數人ニ分與スルコトヲ
得

耕作ノ怠慢ヲ理由トシテ行政處分ヲ以テ耕作民ノ占領地ヲ剝奪スル
ノ權ハメクレンブルヒ、シユベリンニ於テハ千八百六十二年一月十三
日ノ達令第十一節ヲ以テ之レヲ地主ニ委ネタリ

(第七)君主ニ奉スヘキ租税ヲ減少スルトナカラシカ爲メ
ニハ地主ハ必要避クヘカラサル場合ニ於テ其ノ耕作民
ヲ免除スルトヲ得

(ゲゼニウス氏所著耕地法第一卷第五百十葉テネケ―氏所著村邑法第
一卷第六章第三十節普國々法全典第二篇第七章第十四節乃至第十六

節參照)

千八百六十三年一月十三日ノメクレンブルヒ、シユベリンノ達令ニ據レハ地主ノ耕作民ヲ免除スルニハ必ス君主ノ許可ヲ要シ且ツ其ノ人數ヲ制限セリ(フッセル氏所著王室財産及ヒ警察權論第二卷第八百四十二節)普國ニ於テハ千八百〇七年十月九日ノ達令ヲ以テ廢止ス(シリング氏所著サクセン耕地法第百八十八節參照)

(第八)耕地相續ノ順序ハ法律ヲ以テ殊ニ規定セルモノナシト雖適格ナル男子又ハ女子ニシテ適法ノ結婚ヲ爲シタルモノハ他ノ相續人ニ先チ其ノ土地ヲ相續スヘキモノトセリ

(ゲゼニウス氏所著耕地法第一卷第五百十節)フッセル氏所著王室財産及ヒ警察權論第二卷第四百八十二節)ルンデール氏所著獨逸私法論第六百五十節)第五百十七節乃至第五百二十節)ゲルベル氏所著獨逸私法論

第二百五十三節參照)

普國ニ於テハ二十五歲以下ノ男子ハ其ノ父ノ耕地ヲ相續スルヲ得サルモノナリトセリ

千八百六十二年一月十三日ノメクレンブルヒ達令第十二節ニ據ルハ長子ハ常ニ次子ニ先ツテ相續シ女子並ニ其ノ姻族ハ適當ナル直系ノ相續者ナキハ於テ始メテ相續ノ權ヲ有スヘキモノトス若シ又々相續スヘキモノナキハ地主ハ遅クトモ一年內ニ之レヲ適格ナル者ニ貸與セサルヘカラス否ラスンハ再ヒ之レヲ占有スルノ權ヲ失ヒ內務卿ニ於テ之ヲ他人ニ讓與スヘシ

(第九)相續産地所發記簿ニハ君主ニ奉スヘキ借地稅及ヒ其他ノ責任並ニ地主ニ納ムヘキ借地料其ノ他ノ負擔ヲ明記セサルヘカラス

(普國々法令典第二篇第百三十七節乃至第百四十六節)ゲゼニウス氏所

著借地法第一卷第四百九十四葉テネケ一氏所著村邑法第一卷第二百九十二葉參照又此ノ簿冊ハ公證ノ方法ニ供スヘキモノトナレリ
(第十)借地料ノ廢止増減及ヒ借地ノ變更ハ耕作民ノ承諾アリト雖之ヲ爲ストテ禁止セリ

(普國々法全典第三篇第七卷第四百一節第四百四十五節ゲニシウス氏所著借地法第一卷第四百三十一葉及ヒ第四百五十五葉參照)
此ノ禁止ハ租稅上納ノ責ナキ耕作地ニ適用セス如何トナレハ租稅ヲ納ルノ責任ナキ地所ハ君主ノ財政上ニ於ケル利害ニ關係スルコトナケレハナリゲニシウス氏所著借地法第一卷第四百九十六節ストル一ベ
ン氏所著法論第三卷第四百十四節デネケ一氏所著村邑法第一卷第二十章第二百二十三節參照)

(第十一)耕地ヲ毀損セス國庫ノ損失ヲ來サ、ル以上ハ地主ハ全キ耕地料ヲ負擔シ自ラ其責任ニ當ルコトヲ得ヘシ

但シ君主ハ耕作民ノ無能等ノ理由ニ由リ定時又ハ不時ニ其ノ額ヲ減スルコトヲ得

(ゲゼニウス氏所著借地法第一卷第五百三十葉普國々法全典第二卷第七百四十八節乃至第四百九十節フンエル氏所著王室財產及ヒ警察權論第一千二百七十節參照)

(第十二)庸役ノ義務ニ代ユルニ金錢ヲ以テスルハ特別ノ成規ニ由リテ之ヲ定メタリ

(ゲゼニウス氏所著借地法第一卷第五百三十一葉參照)
(第十三)借地料ニ對スル請求權ハ公ケノ租稅ノ外凡テ他ノ私權利ニ先ツテ之レヲ執行ス

(ゲゼニウス氏所著借地法第一卷第五百〇三葉普國々法全典第二篇第七百九十三節參照)

(第十四)負債ノ爲メ耕地ヲ差押ユヘキ地主ノ權利ハ耕作

民ニシテ借地料ヲ怠リ又ハ不當ニ庸役ヲ拒ミタル片ニ
限リテ之ヲ行フコトヲ得

(ゲゼニウス氏所著借地法第一卷第五百六十二葉ゲルベル氏所著獨逸
私法論第六十九節及ヒ第四百四十三節普國々法全典第二篇第七章第四
百八十四節乃至第四百八十七節參照)

第四百四十七節 同上

高等警察權ハ耕作民ノ君主ニ對スル庸役調租ヲ保全シ
テ損害セラル、トナカラシメンカ爲メ地主ト耕作民ト
ノ間ニ立チ雙方ヲシテ適當ナル地位ヲ保タシメンコトヲ
務メタリシモ次第ニ其ノ權力ヲ増シ遂ニ人民ハ其ノ人
身上營業上及ヒ經濟上ノ關係ニ於テ警察權ニ隸屬スル
ノ姿トナリタリ然レモ爲メニ人民ハ古來存在セシ微小
ナル地主ノ隸屬ニ服スルノ風ヲ改メ直接ニ國家ノ公力

ニ服従スヘキモノトナレリ

(シリング氏所著サクソン耕地法第二百〇六節參照)

斯カル方法ニ由リ領主ト耕作民トノ關係ニ於ケル共同
團結ノ性質ハ其ノ精神形骸共ニ消滅シテ只タ財產權ニ
屬スル諸關係ノミ尙ホ僅ニ存在シタレモ此ノ財產權タ
ル本來公ケノ性質ヲ帶ヒタルカ故ニ單ニ之レヲ私權利
トシテ確認スルニ至リテ大ニ困難ヲ極タリ

地領主ノ資格ヲ有セル司法及ヒ警察權ハ本來古代ノ借地法ニ基ケト
モ時勢ノ變遷ニ從ヒ次第ニ君主ノ委任權ニ出ツルモノトシテ之レヲ
執行シタレモ其ノ基源タル素リ君主ノ委任ニ出ツルモノニアラスシ
テ地主統括ノ制度ニ發生セルハ勿論ナリルンデ一氏所著獨逸私法論
第七百〇二節及ヒ第七百〇三節スタイン氏所著行政學第七卷第九
十七葉フツシエル氏所著王室財產及ヒ警察權論第一卷第八百四十二節

第八百四十三節及ヒ第八百四十七節參照

地主ト耕作民トノ占有權ノ關係ハ他ノ獨逸公法ト等シク斯ク全ク廢滅ニ歸シ警察ノ權力代ツテ興リダレ凡此ノ警察權モ亦其ノ發達ノ進路ニ於テ同一ノ衰退ヲ來シタリ蓋シ人類天賦ノ自由主義ニ基キタル國法學ト放任主義ニ基キタル經濟論ハ前世紀ニ於テ大ニ其ノ勢力ヲ擴張シ爲メニ古來ノ警察治國ヲ顛覆セリ蓋シ右等古來ノ諸制度カ人情ト一國富強トノ爲メニ顛覆セラレテ其ノ跡ヲ收ムルニ至ルハ時勢ノ必要ニ出ツルモノニシテ我カ獨逸國ニ於テハ非常ノ勇氣ト忍耐トニ由リ法律ヲ以テ此ノ一大革命ヲ行ヒ就中澳國ニ於テハマリヤ、テレサ及ヒシヨールセフ第二世ノ治世ヲ以テ其ノ尤モ著大ナルモノトナス

（リユグイヒ氏所著獨逸土地束縛ノ解除論第八葉スーゲンハイム氏所著歐洲人身隸屬ノ廢止ニ關スル沿革史第三百七十六葉參照）

蓋シ澳國ニ於テハ千七百八十一年十一月一日ノ特令ヲ以テ人身ノ隸屬ヲ廢止シ且ツ主トシテ國主ニ服従スルノ義務及土地統括權并ニ司法權ニ基キタル金錢物品ノ租稅ニ關スル負擔ノ制ヲ改良セリ次テ千七百八十九年二月十日ノ耕作及地租條例ハ尙ホ之レヨリ大ナル改革ヲ施シ身分ノ如何ヲ問ハスシテ平等公正ノ稅法ヲ布カントラ目的トシ其ノ收稅ノ標準ノ如キモ土地收穫ノ每金百「フロリン」中少クトモ七十「フロリン」ハ占有者ノ耕耘費用家計ノ費用及ヒ市邑ノ費用ニ充テ其ノ餘分ハ半ハ君主ニ奉スヘキ地租トナシ半ハ地主ニ納ムヘキ負擔ニ充テシメタリ然レ凡右等ノ諸法律ハシヨールセフ王ノ死

後未タ久シカラスシテ已ニ千七百九十年ニ於テ再ヒ之ヲ廢止シタルカ故ニ澳國ニ於ケル土地所有ノ改革ハ遂ニ遷延シテ極メテ久シキニ亘レリ

澳國ノ外其ノ他ノ獨逸諸邦ニ於テモ亦大ニ改革ヲ施行シタリ即チ普國ニ於テハフレデリック大王及ヒ殊ニフレデリックキウヰリヤム第三世ノ治世ニ於テハ時ノ宰相スタイン氏主トシテ其ノ改革ニ着手シ有名ナル千八百〇七年十月九日ノ勅令ヲ以テ世襲隸屬ヲ廢シ身分ノ如何ヲ問ハス凡ソ諸種ノ土地占有ヲ許シ且ツ土地所有權分割ノ禁止ヲ解キタリ又翌千八百〇八年七月二十七日ノ達令ヲ以テプロシヤ州中ノ王室地ノ耕作民ニ其ノ所有權ヲ許與シ次テ千八百十一年三月十六日ノ達令同年九月十四日ノ勅令及ヒ千八百二十一年六月七日ノ達令

等ヲ以テ土地ニ關スル束縛制限ヲ除キタリ

(ヘーベルクン氏所著耕地法第六十三節デンニゲス氏所著普國耕作條例第一卷第四十二葉參照)

普國ニ於テハフレデリック第一世ノ時已ニ千七百〇二年十二月十六日ノ達令ヲ以テ王室ニ屬スル土地ニ於テハ人身上ノ隸屬ニ廢止シタルハ恰モフレデリックキウヰリヤム第一世及ヒフレデリック大王カ人身ノ隸屬ヲ廢シ耕作民ノ改良ヲ謀リタル方法ト相類セリ(スーゲンハイム氏所著歐洲人身隸屬ノ廢ニ關スル沿革史第三百七十六葉參照)

然レ右等ノ改革ハ半ハ間接ニシテ半ハ不充分ナル結果ヲ奏セシノミニ過キサルナリ蓋シ土地所有權ノ法理ニ基キタル古代ノ公法ハ其ノ根底ヨリ之ヲ顛覆スルニアラサレハ土地自由權ノ社會法理ハ其ノ實効ヲ見ルト難カルヘシ現ニ今世紀ニ於テモ古代ノ思想未タ全ク

去ラス社會法ノ原理ノ播布ニ比スレハ其ノ實跡ニ於ケル進歩ハ甚々遅々トシテ進マス尙ホ數度ノ革命ヲ經テ其ノ障礙ヲ一拂セサルヘカラサルナリ

(スーゲンハイム氏所著人身隸屬ノ廢止ニ關スル沿革史第三百七十六葉乃至第四百八十三葉スタイン氏所著行政學第七卷參照)

第三章 不動產權束縛ノ解放

第一款 總說

第一百四十八節 土地束縛解放ノ基源
土地束縛ノ解放トハ國權ノ共同作用ニ由リ法律ノ成規ニ從ヒ不動產所有ニ關スル社會法上ノ自由權ヲ回復スルヲ謂フ蓋シ社會法理ハ人身上ノ隸屬束縛ヲ認メサルカ故ニ土地束縛解放ノ直接ニシテ且ツ一般ナル目的ハ

土地ニ關スル束縛制限及ヒ之レヨリ生スル法律上ノ諸結果ヲ廢止シ以テ土地ノ權及ヒ其ノ收穫ヲ得ルノ權利ニ就キ私權利ヲ害セサル限ハ凡テ土地占有ノ事項ヲ以テ社會法ノ成規ニ服セシムルニ在リ故ニ土地束縛ノ解放ハ直接ニ土地ニ關スルモノニアラサルモ尙ホ土地占有ノ關係ヨリ發生スル人身ノ隸屬ハ營業ノ範圍ニ屬スルモノト司法若クハ行政ノ範圍ニ屬スルモノトヲ問ハス凡テ之ヲ廢止セリ

設令ハ古代「マルク」共同組合及ヒ地主統括ノ制度ヨリ生シタル「マルク」及ヒ地主統括團結ノ司法權ヲ廢止スルノ類ナリ(本書前第二百二十七節及ヒ第三百三十一節參照)

凡ソ法律ハ皆ナ道德的ノ性質ヲ有スルカ故ニ社會法理ノ結果ナル土地束縛ノ解放モ亦道德上ノ必要及ヒ人情

ノ然ラシムル所ナリトセサルヘカラス

壓制殘酷ノ取扱ヲ受ケタル耕作民カ法律上ノ獨立ヲ得有スルニ至レ
ルハ道德上ノ必要ニ出テタルヲ證スルニ足レ也(スーゲンハイム氏所
著歐洲人身隷屬ノ廢止ニ關スル沿革史第三百六十葉)又此ノ獨立ハ
土地ノ占有ト耕作民ノ勞働トハ相互ニ關係シテ就中勞働ハ本來自由
ノ原理ニ基カサルベカラサル所以モ亦之ヲ證スルニ足ルヘシ
故ニ土地束縛解放ノ權利ハ其ノ源タル進歩發達シテ止マサル法理ノ
内部ニ於ケル必要ニ出ツルモノニシテ夫ノ國權中ニ存スヘキ假定ノ
至高權又ハ警察治國ノ時世ニ於テハ万民ノ幸福ノ爲メニハ既得權ハ
勿論生命權ト雖モ之レヲ犧牲ニ供シタル警察權等凡テ外部ノ權力ヲ
以テ土地束縛ノ廢止ヲ斷行シタルモノニアラストス(スタイン氏所著
行政學第七卷第百六十四節參照)故ニ又タロウ氏及ヒスタイン氏ノ如
ク之レヲ國家ノ有スル公用土地引上權ノ原理ニ歸スルニ至リテハ其

ノ誤謬益々甚シ(ロウ氏所著國家經濟學第二卷第五十二節及ヒスタイン氏所著行政學第七卷第六十七葉參照)

然レ土地ノ束縛解放ハ必スシモ道德及ヒ人情ノ必要ニ
出ルニ止マラス其ノ沿革上ノ必要モ亦大ニ看過スヘカ
ラサルモノアリ蓋シ土地束縛ノ解放ハ法律及ヒ國家ノ
大革命ト相ヒ伴ヒタルモノニシテ單ニ平和ノ手段ノミ
ニテハ未タ水火相容レサルノ原素ヲ調和スルニ足ラサ
リシナリ

就中其ノ革命ノ著大ナルモノハ佛國ノ大革命那破翁ノ攻戰ニ基キタ
ル歐洲諸邦ノ改革千八百三十年及ヒ千八百四十八年ノ革命是レナリ
而シテ斯カル内部ノ必要ハ進ンテ退クナキ一般ノ文
化發達ニ基キタル新社會ノ漸成ニ發生セルモノニシテ
今マ其ノ著シキ者ヲ舉クレハ左ノ如クナルヘシ

(第一) 學術及ヒ基督教旨ノ發達ニ基キタル一般ニシテ且ツ深遠ナル精神及ヒ道德ノ隆盛ニ至レル事
(第二) 國內及ヒ國ト國トノ間ニ於ケル人類交通ノ便ノ開ケタル事

(第三) 市府及ヒ營業商業ノ隆盛ニ至レル事

(第四) 經濟上物品又ハ勞役等ニ代ユルニ金錢ヲ以テ流通ノ路ヲ開キタル事

(第五) 理論ニ基キタル正當ノ土地耕作法ノ必要ナリシ事

ルンデー氏ハ其ノ著書獨逸私法論第四百八十五節ニ於テ耕作民カ次第ニ寛和ノ取扱ヲ受ケ遂ニ其ノ自由ヲ得タル原因ヲ論及シテ之ヲ左ノ數項ニ歸シタリ

(第一) 基督教旨ヲ擴張シ及ヒ僧正ノ配下ニ屬スル耕作民カ特ニ其ノ優待ヲ受ケタル事

(第二) 十字軍ニ從フカ爲メ耕作民ハ其ノ財産ノ自由ヲ得タル奴隸ニ讓與スルニ寛大ノ條件ヲ以テシタルヲ

(第三) 市府ノ隆盛ノ爲メ其ノ土地ヲ引拂ハントスル多數ノ耕作民ニ自由ヲ許與シタル事

(第四) 獨逸ニ於ケル大學ノ設立及ヒ之レカ爲メニ羅馬法ヲ採用スルニ至レル事

(第五) 耕作民ノ騷亂ニ由リ壓制ノ小地領主ヲ訓戒シタル事

(第六) 新税法ノ制定ニ由リ所有權及ヒ相續權ヲ擴張セシ事

又タスーゲンハイム氏ハ其ノ著書歐洲土地隸屬ノ廢止ニ關スル沿革史第三百五十葉ニ於テ土地所有ノ自由權ノ發達スル原由ヲ擧クルヲ左ノ如シ

(第一) 市府ノ其權力及ヒ重要ノ度ヲ増加セシヲ

(第二) 第十二世紀ノ始メ以來獨逸帝國ニ移住セル下等人民ニ寛和ノ制

限ヲ布キタル事

(第三)獨逸人民カ他ノ地方又ハ外國ニ移住セル事

又々羅馬法理カ植民ノ勢ヲ妨ケタルコトニ就テハスーゲンハイム氏同上著書第三百六十葉及ヒ近世ノ耕作法ニ就テハロウ氏所著國家經濟學第二卷第五十二節參照

右等ノ諸原因ハ相互ニ協同シテ廣大ナル結果ヲ呈シ此ノ理ニ反シタル古代ノ不動產法ハ遂ニ之ヲ實行スルノ地ナカラシメタリ然レトスカル利敏ニシテ且ツ充分ナル改革ニ由リ達シ得タル結果ハ私有財產權ニアラスシラ社會法上各人ノ自由平等ノ原理ナリ而シテ此ノ社會法上ノ自由平等ノ法理ハ次第ニ土地占有上ノ關係ニ布及シ次テ人身上營業上等ノ關係ニ波及セルモノニシテ夫ノ土地束縛ノ解放ハ新ニ公法ノ制度ヲ創設セルモノ

ニシテ私法ノ制度ニ屬スルモノニアラス故ニ此等ノ事項ハ當サニ行政作用ノ事項中ニ論述セサルヘカラサルナリ

第四百十九節 土地束縛解放ノ性狀

土地束縛ノ解放ハ二様ノ方向ニ於テ活動セリ即チ(第一)ハ地主統括及ヒ共同團結的ノ束縛ノ廢止ニシテ此ノ束縛中ニハ古代不動產法ヨリ發生セル單ニ一個人タル資格ニ於ル人身上束縛及ヒ土地占有者タル資格ニ於ケル束縛ヲモ包含セリ(第二)ハ右ノ束縛ヨリ發生セル所ノ土地占有者ノ義務ヲ廢止シ及ヒ移住植民ノ自由ヲ許與セルト是レナリ

此ノ二種ノ束縛ハ明カニ之レカ區別ヲ爲スコトヲ要ス故ニ普國千八百〇七年十月九日ノ勅令ハ只々人身上ノ隸屬及ヒ之レヨリ生スル所ノ義

務ヲ廢止セルノヨニシテ自由人タル資格ニ於ケル耕作民カ其ノ土地ノ占有ヨリ發生セル義務又ハ特別ノ契約ニ基キタル義務並ニ地主ニ奉スヘキ租稅負擔ハ尙ホ依然トシテ存在セリ

故ニ今マ土地束縛ノ解放中ニ包含セル事項ヲ舉クレハ左ノ如シ

(第一)耕作民ノ人身上ノ隸屬及ヒ責任

(第二)土地ニ對スル地主權(最高所有權)

(第三)「レアラストン」

(第四)土地占有ニ基キタル共同的團結

(第五)土地住民ノ庸役

(第六)封建祿地制

(第七)地主ノ司法權

此等諸種ノ事項ニ就キ各獨逸諸邦ハ皆ナ土地束縛ノ解放ヲ行ヒタリ

ト雖其ノ實際ハ必ズシモ盡ク充分ナリシニアラストス

又々立法官ノ制定セル法律條例ハ斯ノ如ク學術上ニ於ケル細密ノ區別ヲ設ケス是レ土地占有ニ關スル諸事項ハ極メテ錯雜繁多ナルノ故

ニ出ツルト雖概スルニ其ノ事項ハ人身上ニ於ケル隸屬ニ出ツルモノニアラサレハ必ズ土地占有ノ束縛ニ屬スルモノニ外ナラストス(ルン

テ)氏所著獨逸私法論第五百〇四節第五百二十四節及ヒ第五百三十八節參照)

右等ノ如キ公權利ハ土地占有權ト密着シテ其ノ發達ヲ爲シタルカ故ニ次第ニ既得權ノ性質ヲ帶ヒ其ノ權利者ニ相當ノ損害贖償ヲ爲スニアラサレハ猥リニ其ノ權利ヲ剝奪スルトヲ得ス故ニ權利ノ性質ニシテ其ノ贖償ヲ爲シ得ヘキモノタル限リハ斯カル權利ノ廢止ト共ニ之レカ損害ヲ償却セサルヘカラス然レモ獨逸並ニ外國ノ

立法ニ於テハ現ニ此ノ理ヲ實行スルナク土地束縛ノ解放ハ容易ニシテ且ツ適當ナル方法ニ由リ之ヲ行ヒタリ但シ金錢ニ計算スヘキ價值ヲ有スル權利ハ之レニ對スル損害ヲ贖償セシハ勿論ナリト雖又々決シテ充分完全ナル贖償金ヲ附與セルナカリシナリ就中土地ト關係ナキ單純ナル人身上ノ關係ニ基キタル諸義務ニシテ其ノ人身自由ノ原理ニ反對スルモノ設令ハ人身ノ隸屬及ヒ之レヨリ生スル義務ノ如キハ其ノ權利者ニ毫末ノ償金ヲ與ヘスシテ之ヲ廢止セリ

(千八百〇七年十月九日ノ普國勅令千八百五十年三月二日ノ同上法律第二節及ヒ第三節千八百四十九年三月四日ノ澳國法律第一節千八百四十八年六月四日ノバエールン法律第二條乃至第六條參照)
獨逸ニ於ケル土地束縛解放モ亦一般右ノ原理ニ由リテ

實行シタル時ニ臨ミテハ或ハ多少ノ障礙ヲ來シタルカ故ニ其ノ普通統一ノ法律ヲ布クニ至リテハ大ニ困難ヲ覺ヘタリ

(ユードイヒ氏所著獨逸土地束縛解放論第四葉スーゲンハイム氏所著歐洲土地束縛ノ廢止ニ關スル沿革史第四百八十三葉參照)

第二款 人身隸屬ノ廢止

第百五十一節 同上

奴隸并ニ其ノ他ノ人身隸屬ノ廢止ハ本來社會法上人身自由權ノ結果ニ基クモノト雖土地束縛解放ト共ニ協合シタル結果ナルノミナラス先ノ土地束縛ノ解放ニ由リテ始メテ其ノ實行ヲ見ルニ至レリ

(人身隸屬ノ廢止ノ社會法理ニ出ツル所以ニ就テハ本書前第二十八節ノ附論ヲ參照セヨ)

人身隸屬ノ廢止ハ土地束縛ノ解放ト併行シテ始メテ其ノ實行ヲ得タルハ獨逸ニ於テ殊ニ然リトス如何トナレハ獨逸ニ於テハ土地上ノ關係ヨリ發生セル隸屬ト人身上ノ隸屬トハ常ニ密着シタレハナリ

土地束縛ノ解放ハ隸屬者及ヒ其ノ妻子ノ主人ニ對スル隸屬ハ勿論其ノ人身上ノ隸屬ヨリ生スル義務負擔ハ土地ニ關係ナキモノト雖盡ク之レヲ廢止セリ

(千八百〇七年十月九日ノ普國勅令千八百五十年三月二日ノ同上法律第三節千八百四十八年九月七日ノ澳國特令第一節及ヒ第五節千八百四十九年三月四日ノ同上達千八百〇八年八月三十一日ノバエールン勅令千八百四十八年六月四日ノ同上法律千八百三十二年三月十七日ノサクセン法律第二百九十三節及ヒ第三百〇二節千八百三十一年十一月十日ノハンノーベル法律千八百三十八年五月八日同上法律千八百四十八年七月三十一日ノ同上法律千八百五十年五月五日ノサクセ

ンマイニンゲン法律第一條及ヒ一般人身隸屬ノ結果ニ就テハ本書前
 第三百三十六節ミツテルニイエル氏所著獨逸私法論第九十九節參照)

今マ土地束縛解放ニ由リテ廢止セル事項ヲ舉クレハ左ノ如シ

(千八百〇七年十月九日ノ普國勅令及ヒ千八百三十二年三月十七日ノクルサクセン法律第二百九十三節及ヒ第三百〇二節參照)

(第一)人身ノ隸屬ヲ免ル、爲メニ其ノ主人ニ收メタル賠償金

(第二)地主カ其ノ保護ノ下ニ在ル所ノ人民ヲシテ庸役ヲ爲サシムルノ權

(第三)人身ノ隸屬ヲ受ケタル者ノ子ノ使役及ヒ庸役ヲ受クルノ權

(第四)他ノ管轄内ニ移住スル許可金ヲ徵收スルノ權

(第五)或ル一定ノ年齢(二十四歳)ニ達シタル者ヲシテ村邑ノ役ニ服セシムルノ權

(第六)多數ノ相續者アルニ當リテ其ノ父母ノ財産ヲ相續スヘキモノヲ指定スルノ權

(第七)結婚ヲ指定シ及ヒ習得スヘキ職業ヲ指定スルノ權

(第八)隸屬者死去セシ片ハ其ノ遺産ノ幾分ヲ領收スルノ權

此等ノ權利ハ土地束縛ノ解放ト共ニ廢滅シタルモノニシテ且ツ其ノ權利者ニ對シテハ一般ニ損害ヲ賠償セルコトナカリシナリ(千八百四十八年六月四日ノバエールン法律第三條千八百五十年五月五日ノサクセンマイニンゲン法律第一條ヲ參照スヘシ但シクルサクセン及ヒハ
ンノーベル等ニ於テハ此等ノ權利ヲ剝奪スルト共ニ之レニ賠償ヲ與ヘタリ(千八百三十二年三月十七日ノ法律二百九十五節及ヒ第二百九

十七節千八百三十三年七月二十三日ノハンノーベル法律第三十九節參照)

第三款 土地ニ對スル地主權ノ廢止
第百五十二節 同上

土地ニ對スル地主權(至高所有權)ノ廢止ニ由リ從來土地ノ占有者タリシモノハ其ノ土地ニ就キ自由完全ナル所有權ヲ得有シ其ノ私法上ノ賣買讓與質入分割等ニ就キテハ權利者即チ至高所有主ノ共同作用ニ服スルコトナキニ至レリ

(千八百十一年九月十四日ノ普國耕地令第一節千八百五十年三月二日ノ同上法律第二節及ヒ第三節千八百四十八年六月四日ノバエールン法律第十六條及ヒ第十七條千八百三十二年三月十七日ノクルサクセン法律第三百節千八百三十一年ハンノーベル法律第一條千八百三十

三年七月二十三日ノ同上法律第一節及ヒ第二節千八百四十八年九月七日ノ澳國指令第二節及ヒ第三節千八百五十年五月五日ノサクセンマイニンゲン第一條リヨンネー氏所著普國々法論第一卷第二章第九十五節シエーマン氏所著千八百五十年三月二日ノ法律注解第十八葉ユーダイヒ氏所著獨逸土地東縛解放論第六十一葉參照)

斯ク土地占有者ニ其ノ所有權ヲ得有セシメタルハ或ハ法律條例ヲ以テ土地ノ束縛制限ヲ廢止シタルニ由リ或ハ地主即チ權利者ノ從來所有セシ地上ノ權利ヲ金額ニ計算シ一定ノ成規ニ從ヒ之レニ其ノ損害ヲ賠償セシニ由レリ

(千八百五十年三月二日ノ普國法律第二節第七十三節乃至第八十四節千八百三十二年三月十七日ノクルサクセン法律第七十七節及ヒ第八十六節千八百五十一年五月十五日ノ同上法律千八百三十一年十一月

十日ノハンノーベル法律千八百三十三年七月二十三日ノ同上法律千八百五十年五月五日ノサクセンマイニンゲン法律第三十一條千八百四十八年九月七日ノ澳國法律第二節及ヒ第三節參照)

右賠償ノ成規ハ或ハ一地所ノ負擔スヘキ全体ノ義務ニ就キ或ハ只タ其ノ一部ノ義務ニ就キ其ノ權利者ニ償フヘキ金額ヲ定メタリ

(千八百四十八年六月四日ノバエールン法律及ヒペーツル氏所著バエールン憲法第六十七節參照)

土地所有權ノ附與ト共ニ廢止シタル諸權利左ノ如シ

(第一)土地沒收權及ヒ其ノ他地主ノ特權

(千八百五十年三月二日ノ普國法律第二節第四項千八百四十八年六月四日ノバエールン法律第十五條第二項參照)

(第二)獵リニ借地稅ヲ課スヘキ至高ノ地主權

(千八百五十年三月二日ノ普國法律第二節第五項參照)

此ノ地主權利ハ已ニ警察權ヲ以テ剝奪セリ(本書前第四百四十六條參照)
(第三)土地先買權及ヒ其ノ他ノ特權但シ契約遺囑及ヒ相續者ノ權利ニ基キタル片ヲ除ク

(同上普國法律第二節第六項千八百三十二年三月十七日ノクル、サクセ
ン法律第七十七節及ヒ第二百九十三節參照)

(第四)日雇ニ服セシムヘキ權利

(同上普國法律第二節第七項同上クル、サクセシ法律第五十三節參照)

(第五)土地占有者ニアラスシテ地主ノ保護ヲ受クル者ノ庸役ヲ爲サシムルノ權

(同上普國法律第三節第三項千八百五十年五月五日ノサクセシ、マイニ
ンゲン法律第一條參照)

(第六)地主ノ司法及ヒ警察權執行ニ關スル費用ノ爲メニ

スル租稅

(同上普國法律第三節第四項及ヒ千八百三十二年三月十七日ノクル、サ
クセシ法律第五十三節參照)

(第七)各事件ノ裁判費用ノ爲メニスル租稅但シ法律ノ明文ヲ以テ特ニ定メタル地稅ニアラサル片ニ限ル

(同上普國法律第三節第五項參照)

(第八)獸獵ニ關スル一般ノ租稅

(同上普國法律第三節第六項千八百三十三年九月三日ノクル、サクセシ
法律千八百五十年五月五日ノサクセシ、マイニンゲン法律第一條第二
項參照)

(第九)地主ノ家屋地所保護ノ爲メニスル一般ノ調租庸役

(同上普國法律第三節第七項千八百三十二年三月十七日ノクル、サクセ
シ法律第五十三節參照)

(第十)地主及ヒ地主統括官吏ノ人身上ノ必要ノ爲メニス
ル庸役

設令ハハ地主又ハ官吏ノ邸宅ノ掃除及ヒ身体ノ護衛等ナリ(普國同上
法律第三節第八項)

(第十一)地主ノ家族ノ嫁資及ヒ其洗禮費ノ爲メニスル納
金

(同上普國法律第三節第九項參照)

(第十二)地主ニ奉スヘキ凡テ租税ノ性質ヲ帶ヒタル納金

設令ハハ私シノ川流ヲ利用シ又ハ牧畜ヲ爲ス等許可ヲ得ルカ爲メノ
納金同上普國法律第三節第十項及第十一項參照)

(第十三)地主統括ノ或ル土產物ヲ販賣スルノ義務

(同上普國法律第三節第十二項參照)

(第十四)他人ノ地内ニ倒レ又ハ延長シタル材木ヲ利用シ

及ヒ之レヲ己レカ所有トスル地主ノ權

(同上普國法律第三節第十三項參照)

(第十五)道路牧場ニ關スル地主ノ權

(同上普國法律第三節第十四項參照)

(第十六)從來存在セサリシ土地十分税ヲ徵收スルノ權

千八百四十八年六月四日ノバエールン法律第四條千八百五十年三月
二日ノ普國法律第三十五節千八百三十三年七月二十三日ノハンノ
ベル法律第三百三十六節參照)

(第十七)占有地變更ニ就キ上納スヘキ手數料

千八百五十年三月二日ノ普國法律第三十六節及ヒ第三十九節參照)

(第十八)地主ト借地人トノ關係ニ於テ地主統括團結ヨリ
發生セル總テノ權利義務

設令ハハ不幸ニ際シテ救助スル義務家宅ノ建築修繕ノ義務等ヲ云フ

(同上普國法律第三節第十五項千八百五十年五月五日ノサクセンマイニッケン法律第一條參照)

右等ノ權利義務ハ半ハ地主統括ノ廢止ニ由リテ消滅シ權利者ニ其ノ損害ヲ償フイナク半ハ賠償ノ成規ニ從ヒ消滅セリ

(トルマン氏纂ハエールン法律集中ペーツル氏所論第一卷第二百〇八葉參照)

第四款 「レアラステン」ノ廢止

第一百五十三節 「レアラステン」廢止ノ方法

「レアラステン」ノ廢止ハ單ニ法律ノ命令ニ由レルノミナラスシテ又々土地上諸義務ノ解放即チ公ケノ束縛ヲ變シテ私權利私義務ノ性質ニ更メタルニ發生セル結果ナリ

ペーツル氏ハ土地上諸義務ノ解放ヲ以テ此等諸義務ノ買収トスレモ義務者ハ引續キ借地料ヲ拂ヒ又ハ土地幾分ノ分割ヲ受クルモ其ノ隨意ニ一任シタルイナレハ決シテ之レヲ買収ト見做スベカラヌ只タ地上ニ屬スル公權利公義務ノ性質ヲ變更シ之レヲ價格ニ改メテ私權利私義務ト爲セシノミ故ニ時々ノ契約ヨリ發生セル私權利私義務ニ就テハ土地上諸義務解放ノ法則ヲ適用スルイナシ(同氏所著ハエールン憲法第六十八節千八百四十九年三月四日ノ澳國法律第七節及ヒ第八節千八百四十九年四月十六日ノハエールン内閣議決千八百五十年三月二日ノ普國法律第八節千八百三十一年十一月十日ノハンノーベル法律第七節及ヒ第九節參照)

故ニ「レアラステン」ノ廢止ハ(第一)共同ノ土地占有ヲ其ノ權利者ニ分與セルト混同シ(第二)「レアラステン」ノ種類及ヒ其ノ實質ヲ變性セルト同視スルイアルヘカラス

如何トナレハ第一ハ現ニ地上ノ義務ヲ廢止セルモ之レト共ニ廢止セルモノハ只々所有權ヨリ發生セル諸權利義務ニシテ法鎖即チ人々相互ノ關係ヨリ發生セル權利義務ヲ廢止セルニアラス又々第二ハ只々「レアラステ」ノ性質ヲ變更セルニ止マルモノナレハナリ

(千八百三十一年十一月十日ノハンノーベル法律第九節及ヒ第十一節
千八百五十年三月二日ノ普國法律第六十二節及ヒ第九十八節千八百五十年五月五日ノサクセンマイニンゲン法律第十五條及ヒ第二十條
千八百四十八年六月四日ノバエールン法律第七條及ヒ第八條ベーツル氏所著バエールン憲法第六十七節千八百三十二年三月十七日ノクルサクセン法律第七十五節及ヒ第九十九節參照)

要スルニ土地上諸義務解放ニ基キタル「レアラステ」ノ廢止ハ或ハ法律自身ヲ以テ其ノ廢止ヲ命シ「レアラステ

ン」ヨリ生シタル權利義務ハ間接ニ解除ノ姿トナリ又ハ法律ハ單ニ「レアラステ」ヲ廢止スル「レ」ヲ得ル「レ」ヲ明示シ現ニ之ヲ廢止スルト否トハ權利者義務者ノ意思ニ一任セリ即チ一言以テ之ヲ掩ハ、前ノ方法ハ正面シテ即チ積極ナルモノナリ後ナル方法ハ裏面ニシテ即チ消極ナルモノナリ

(千八百四十八年九月七日ノ澳國特令第二節及ヒ第三節千八百四十九年三月四日ノ同上法律第一節及ヒ第二節千八百五十一年五月十五日ノクルサクセン法律千八百四十八年六月四日ノバエールン法律第八條ハ正面ノ廢止方法ニ屬シ千八百三十二年三月十七日ノクルサクセン法律第二十三節千八百三十三年七月二十三日ノハンノーベル法律千八百三十一年十一月十日ノ同上法律第十七節及ヒ千八百五十年三月二日ノ普國法律第六節ハ表面ノ廢止方法ニ屬ス)

ニシテ又々之レニ契約上義務解除ノ原理ヲ適用セント
欲セハ先ツ特別ノ法律條例ヲ以テ「レアラステン」ノ本性
ヲ變シテ契約上ノ權利義務トセサルヘカラサル所以ナ
リ
特別ノ法律ニ由リ「レアラステン」ノ權利義務ヲ變シテ已
ニ人々相互ノ關係ニ於ケル契約上ノ義務トスル片ハ即
チ左ノ數原則ヲ生スヘシ

(第一)「レアラステン」ノ權利義務ハ權利者又ハ義務者ノ一
方ノ請求ヲ以テ隨意ニ之ヲ解除スルコトヲ得

(千八百五十年三月二日ノ普國法律第九十四節第九十七節千八百五十
年六月廿日ノクルヘツセン法律第三節千八百三十二年三月十七日ノ
クル、サクセン法律第一節第二十二節乃至第二十四節千八百五十年五
月五日ノサクセン、マイニンゲン法律第七條及ヒ第三十條千八百三十

一年十一月十日ノハンノーベル法律第二十九節千八百四十八年六月
四日ノバエールン法律第八條及ヒ二十三條參照)

(第二)「レアラステン」ノ解除ハ土地占有者カ其ノ資格ヲ以
テ地主統括主ニ對シテ負擔セル凡テノ調租庸役ノ解除
及ヒ借地其ノ土地所有權ノ一部ニ關スル契約ヨリ生ス
ル義務ノ解除ヲ包括ス

(千八百三十二年三月十七日ノクル、サクセン法律第五十節千八百三十
一年十一月十日ノハンノーベル法律第一節千八百五十年三月二日ノ
普國法律第六節千八百五十年五月五日ノサクセン、マイニンゲン法律
第二條千八百四十八年九月七日ノ澳國法律第六節參照)

(第三)「レアラステン」ノ解除ハ左ノ義務ヲ包含セス
甲、凡テソ公ケノ租稅

(千八百五十年三月二日ノ普國法律第六節千八百五十年五月五日ノサ

クセン、マイニンゲン法律第三條千八百六十一年五月二十四日ノ普國法律第十節參照)

乙)市邑并ニ其ノ他公ケノ性質ヲ有スル共同体ノ目的ニ供スル調租庸役(堤防河岸ノ築造ノ類)

市邑又ハ其ノ他公會ノ資格ニ於テセサル特種ノ權利義務設令ヘハ地主統括ノ關係又ハ十分稅ノ制度ニ基キタルモノ、如キハ市邑又ハ公會ノ有スル權利ハ「レアラステン」ノ廢止ト共ニ消滅セサルモノニアラス

(千八百五十年三月二日ノ普國法律第六節千八百三十二年三月十七日ノクル、サクセン法律第五十二節千八百三十一年十一月十日ノハンノーベル法律第三節千八百四十九年五月五日ノバエールン法律及ヒ千八百四十九年三月四日ノ澳國法律第六節參照)

丙)教會寺院及ヒ學校ノ建築修理但シ特ニ「レアラステン」

ノ廢止ト共ニ消滅スヘキ事項ニ屬スルトハ此ノ限リニ在テストス

(千八百三十一年十一月十日ノハンノーベル法律第三節千八百五十年三月二日ノ普國法律第六節及ヒ千八百五十七年四月十五日ノ同上法律千八百四十九年五月五日ノバエールン法律參照)

澳國ニ於テハ千八百四十九年三月四日ノ法律第六節ニ依リ此ノ場合ニ於テモ尙ホ庸役ヲ廢スルコトヲ得ヘキモノトスレドモ法律自身ヲ以テ直接ニ其ノ廢止ヲ命シタルモノニアラス

クル、サクセンニ於テハ千八百五十年二月十日ノ法律ヲ以テ此ノ場合ト雖純然タル教會權ノ性質ヲ帶フルモノニアラサレハ尙ホ解除スルコトヲ得ヘキモノトセリ(千八百三十二年三月十七日ノ同邦法律第五十二節千八百五十三年十月二十二日ノ同邦達及ヒ千八百五十一年五月十五日ノ同邦法律第十節參照)

丁王室ノ特權ニ基キタル凡テノ負擔

設令ヘハ礦鹽稅ノ如キ王室ノ特權ニ屬スルモノハ之ヲ廢止スルヲ能ハスト雖他ノ稅法ヲ以テ之レニ代ユルヲ得(千八百五十年五月五日ノサクセン、マイニンゲン法律第三條千八百三十二年三月十七日ノクルサクセン法律第五十二節參照)

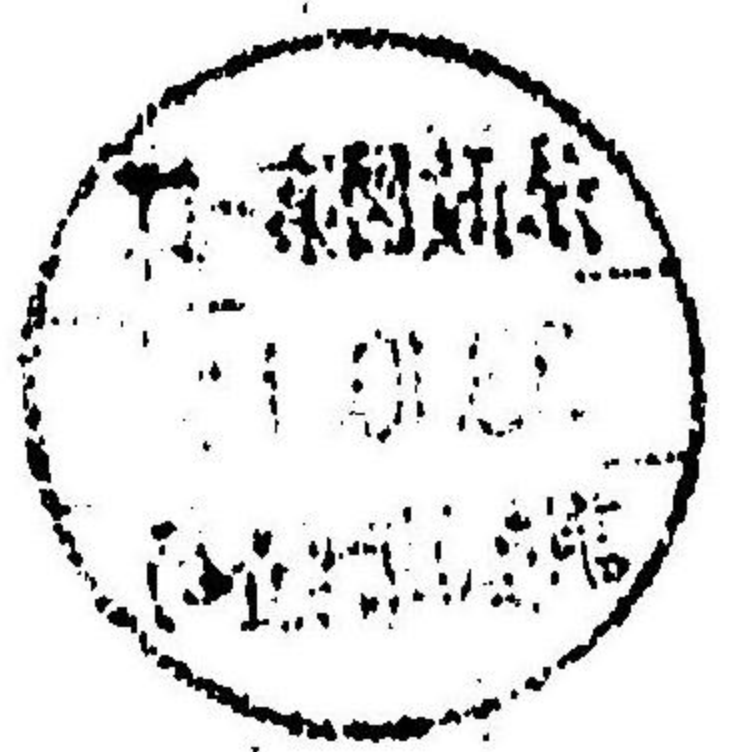
(第四)レアラスタン解除ニ就キ其ノ償フヘキ損害ノ標準尺度ハ其ノ義務責任ノ價格ニ從ヒ其ノ容易ニ一定シ難キモノハ法律ノ規定スル所ニ據ル

(本書以下第百五十五節參照)

社會行政法論終

正誤

- 十八丁五行 倭人ハ 倭入ノ誤
- 三百二十二丁十行 植民ハ 殖民ノ誤
- 三百二十八丁十行 町村團ノ下結字ヲ脱ス
- 三百四十二丁二行 常ノ下規字ヲ脱ス
- 同 丁三行 附屬ハ 所屬ノ誤
- 四百四丁一行 附如ハ 附加ノ誤
- 四百四十二丁七行 本姓ハ 本性ノ誤
- 五百一丁七行 團結ハ 團結ノ誤
- 五百九丁十三行 九ノ下年字ヲ脱ス
- 五百二十丁十三行 同親ハ 同視ノ誤
- 五百三十四丁七行 期約ハ 規約ノ誤
- 六百十五丁一行 享有ハ 享有ノ誤
- 六百十七丁六行 享有ハ 享有ノ誤
- 六百三十二丁十三行 市員ハ 市邑ノ誤
- 六百七十三丁十行 土地ハ 土地ノ誤
- 七百九十八丁十一行 ツデロヒンエム氏ノロハイ



明治十八年一月廿日出版版權屆
明治十九年一月二十日再版
明治二十三年一月廿日三版

警視廳藏版

東京銀座四丁目	博聞本社
大阪備後町四丁目	博聞分社
千葉縣千葉町	博聞分社
埼玉縣浦和町	博聞分社
福岡縣博多中島町	博聞分社
佐賀縣佐賀	博聞社代理店



大 販 賣 所

東京神田南神保町	尾州名古屋本町	駿州静岡江川町	信州長野町	福島縣福島	陸前仙臺大町	函館末廣町	越後長岡	加州金澤	伊豫松山港町	備前岡山	藝州廣島大手通一丁目	肥後熊本	薩州鹿見島六日町通中町
博 弘 堂	片野東四郎	廣瀨文林堂	西澤喜太郎	石川支店	木村文助	魁 文 社	目 黑 十 郎 社	牧 野 一 平	土 肥 與 平	森 禎 藏	早 速 社	長 崎 次 郎	吉田幸兵衛

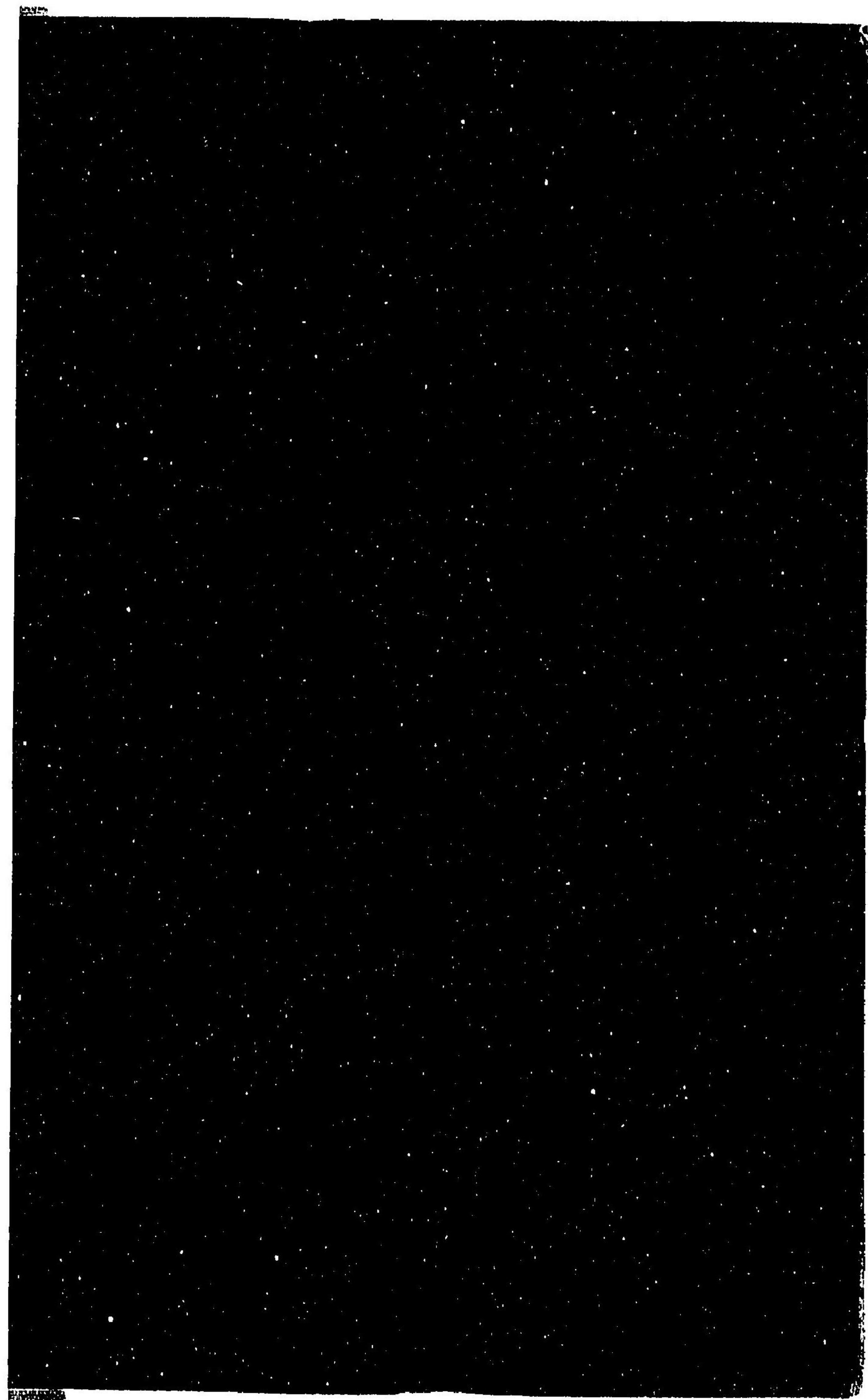
販 賣 所

東京日本橋通三丁目	東京神田表神保町	東京表神保町	東京南神保町	東京	西京東洞院三條上ル	西京佛光寺通烏丸東入	西京河原町通	西京寺町通五條上ル	大阪本町四丁目	大阪心齋橋通二丁目	大阪備後町四丁目	横濱辨天通四丁目	肥前長崎引地町	越後新潟古町通二番町	濃州岐阜	紀州和歌山北町	越前福井照手上町	備前岡山	雲州松江本町	因州鳥取火ノ見下	阿州徳島	陸奥弘前土手町
丸善書店	中西屋邦太	日本法律雜誌社	須原鐵二	築 成 社	村上勘兵衛	東枝吉兵衛	大黒屋太郎右衛門	飯田信文堂	岡 島 興 七	松村九兵衛	吉 岡 平 助	丸 善 書 店	鶴 野 常 藏	井 筒 駒 吉	三 浦 源 助	津 田 源 兵 衛	岡 崎 左 喜 助	細 山 喜 三 右 衛 門	園 山 喜 三 右 衛 門	前 島 榮 次 郎	阪 井 萬 吉	野 崎 九 兵 衛

仲松堂書店

211/25





032089-000-7

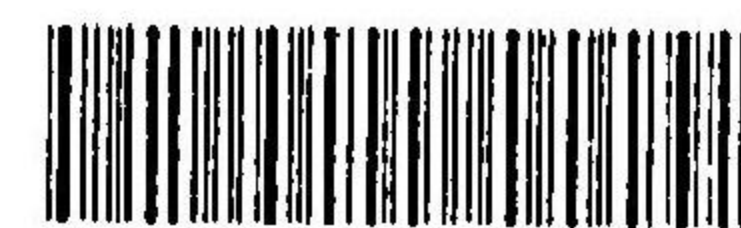
323.9-cR71sE

社会行政法論 3版

ヘルマン・リョースレル/著

M23

BBG-0115



和
第
七
四
八
號

